四季部類

俳諧集句新撰草

春

春中

祝

祭

明治十四年四月廿六日

如意山人敬

百錬

初二

版權所有
東都書肆
鳳凰堂

夕立や田を三圍の神しまハ　其角

暖簾の風を
さまたげて
ゆらるる
秋の風　虎雪

灌佛や
めぐまるる
一寸に
さまたげり　文考

部ハ学問
儒士のつとめ

本箱さまたる
柳の美しき
許元

雪晴の
うつくしを
喜ぶ　丈草

起てもあるても
あるも蘭うの形　青来

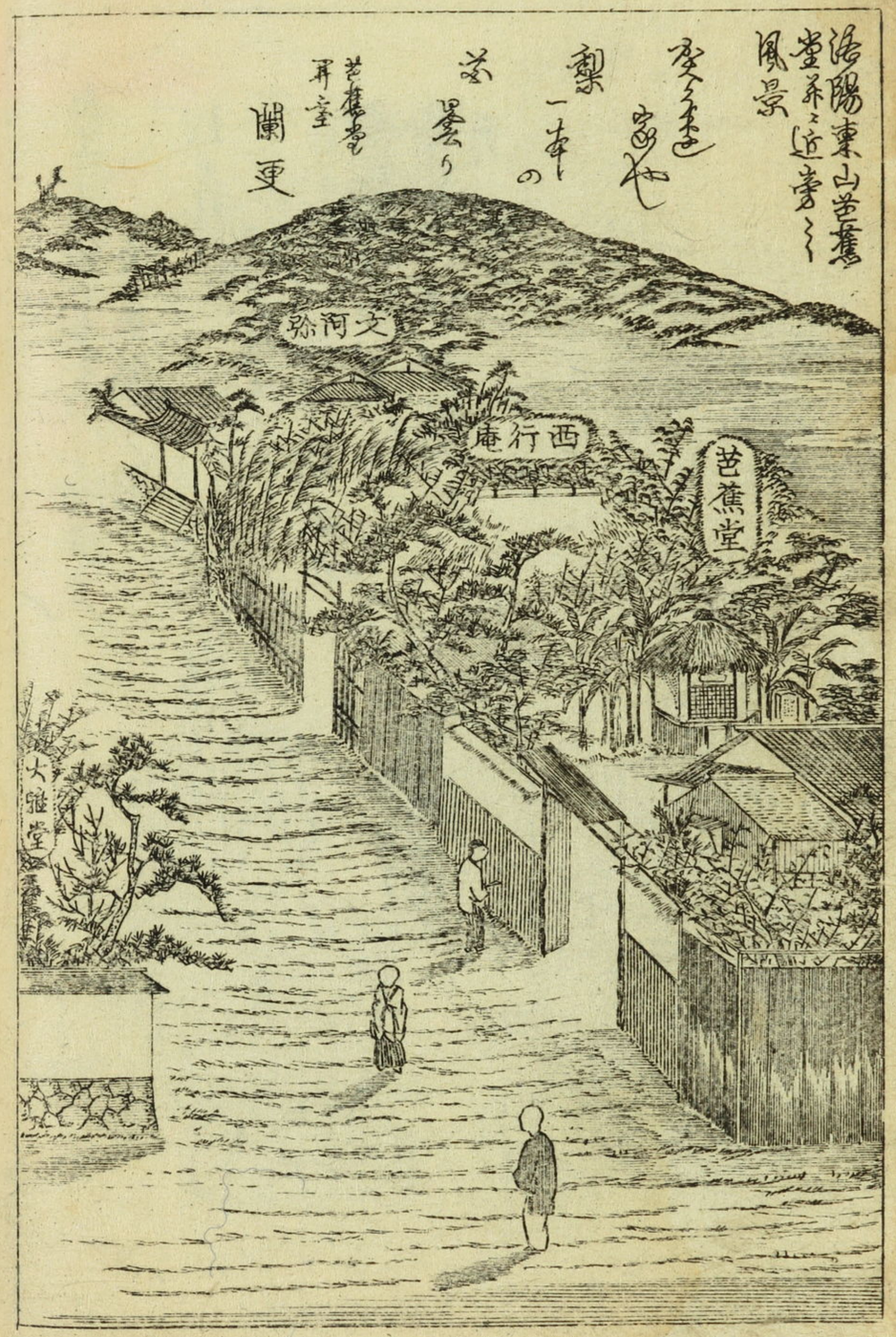
松ぬぎて
人まつうの
ゆうべかな　野坡

鴨鍋の
さめぬ
間しし　友汁

月　业松

彩雲や
その日乃
十四の彩　彩風

金の
まつも
緑也
冬の柳
哉　越人



凡例

此編ハ四時ニ部類ヲ分チ月毎ニいろはノ文字ニ其季題ノ頭音ヲ引此ニ注釋シ以テ專ラ席上ノ便トス

但シ○さつき、かう、又ハさつき、せう、又ハさつ、たう、ちう、へう、ちの類は假名遣ひを悪く正して都をもつて時を初めの意とするなれハ凡そ〳〵ことなるものの意あるもまた〳〵ハ

くさつき、かう、の類を❷の部せうハ❸さつハ❺さつの部に今也出まく〳〵

今年も見へ準も看官諸君ましまくし

八十年故事及節會禮式神佛祭典等ハ陽曆改正ノ後大ニ變アリト雖モ舊來ノ俗ニ出ス見別ニ新旧季節ノ差違又ハ諸國ノ神祭ヲ新暦ヨリ抄出ス

但中❶印を初つる事を題に附屬まくるもの或異名等あるを頭書を引て

ひつくるものハ事數を抜り抄出まくし

頭義標目

四季部類

月毎に乾坤万物生数神祇衣食等事物の部主分ち新しく
図を編み出し春夏秋冬合せ四季の古今名家の句を撰び初下より
二の表にうつる七十八丁ふくる

見日拾遺 七十九丁　一巻之式 賦物 同丁　和漢之事 八十丁
万句千句十百韻 八十二丁　百韻之式 同丁　米字之式 同丁
七十二候之式 同丁　易之式 同丁　源氏之式 八十二丁
五十韻之式 同丁　四十四之式 同丁　歌仙之式 同丁
長歌行之式 同丁　短歌行之式 同丁　十八公之式 同丁
首尾之式 八十三丁　表合之式 同丁　發句脇第三之事 八十三 四丁
四句目之事 同丁　月花の定座 八十五丁　去嫌大意 同丁
句数并考據 八十六丁　季節之跨物 八十八丁　嫌古式八ヶ條 八十九丁
指合之事 九十三丁　正花之事 九十七丁　戀之詞 九十九丁

切字之事 百七丁　発句之格 百十三丁　押字抱字之格 百十五丁
執筆法式 同丁　附合之事 百十八丁　七名八体之事 同丁
歳句・綴附之事 百廿丁　同第三附之事 百廿四丁
文字留第三之事 百廿六丁　冬中連綿之事 同丁
名所地名違附之事 百廿五丁　畳語之事 同丁
和歌諸風体 百廿六丁　短哥 同丁　旋頭哥 同丁
混本哥 百廿七丁　廻文 同丁　俳諧哥 同丁　折句 百廿八丁
折句沓冠 同丁　物名 同丁　贈答 同丁　蕉翁古池之句 百卅九丁
同遺稿 百四十一丁　名所地名 ※字数部分　二字之部 百四十七丁
三字之部 百四十九丁　四字之部 百五十四丁　五字之部 百五十八丁
年賀之称 百六十二丁　追善年忌之称 同丁
俳諧七部集 自百六十三丁 至二百廿四丁

附録

俳諧之字義

俳諧連歌之権輿 并ニ俳諧風体之詩

俳諧之大意

標目終

明治新版 四季部類

一月之部

歳旦之詞

元旦

元朝。元日

鶏旦。改旦

叢物。叢首

上旦。正朝

聖節。主君

屠蘇。元

初空

初鶏

初鳥

初明

日の初

初夢

初霞

降

俳諧歳時記新栞草 巻之一

京都 山口素堂編輯

一月

院拜禮 大府記 延久五年正月元日辛巳、院拜礼、午刻諸卿以下参集、次ニ畫御座庇御簾ヲ五ケ間次ニ御出直御装束也次ニ関白前太政大臣、右大臣、并大納言、中納言、参議以上一列庭中ニ次殿上四位以下、別當判官代等一列、拝舞了之後、従上膳次第退略記

嚴嶋

祭 マツリ 下の亥 国幣中社ハ神ハ市杵島姫命ハ藝の国伊都伯彦ハ毎年正月下の亥日神祭行

寢積

寢積 寢ヲ稲ヲ和訓同ジキ故ニ祝詞ヲ寢ヲ稲ヲ又稲の縁語ヲ雑談抄ニ云寢

寢祭 寢ヲ稲ヲ和訓同ジキ故ニ祝詞ヲ寢ヲ稲ヲ又稲の縁語ヲ雑談抄ニ云寢

芋頭

四季部類 俳諧歳時記新栞草

一月 歳旦 一

井戸ら記 つゝ井 井茶屋

若水 初子 玉

四方拜 朝拜

朝賀。小弓拜 奏瑞 奏賀

水の樣 七曜の暦

國祈奏 玉祈人。玉祈屋

院の拜禮 年禮

御慶 年の初

たゝはをし

年立 年立くる

新玉の月

改年 明る年

とゝ唱るハ例の祝語なり玉蕃頭 玉頭 玉ごの

かゝをうゝ

いゝのまゝ

見を用る

子の義なり

磯菜摘

磯邊の菜 八重垣

飯稍

和漢三才圖會 云 かゝ元五六寸

へハ玉頭鶏の卵のゝ如く腹中に白肉滿つ煮て食

粒蒸たる飯の如し故に飯と名つく旧正月

凝かゝる

字彙 云 凝 冰堅也○

氷の再び結び

氷の産飯 氷

居籠

九日 夷祭 十日 稱名西の宮

神社の祭也

村氏方の

竈ゝ

櫻陽雜談 云 毎年正月九日 姪兒尊廣田の社

ゝ給幸あり神の容相吳ゝを以て人倫の見んを恥

なるゝの誘ゝ有て村氏戸を閉て外へ出ず門松を

遠に建て居あるを云 明且戸を開きて年賀を世

俗ゝを十日過ゝ云 此神ハ聲ゝ悪しゝ参

詣の人社殿のうゝ板をゝ敲くゝ或人曰此說大

晴往昔ゝの社を稱後の演ゝ者ゝ打ゝ浪風烈

しき時ハ神前ゝ彫先ゝ来りて新ゝ拜まゝと

雖ゝ後へ引ゝ相国板を下き拜せゝ

新年 遠年

若き年 賈の年

今年 去年

年の花 年玉

年男 大ゝ

齋蘇 藥子

薺 固雜煮

かんを大根いまゝ

太箸 鏡餅

喰 搗 蓬 菜

かゝや

ゝ栗

ゝ榊 串かき

だゝ

ゝ

ゝ

梅かし	鶯の声	鶯の帰	初鴉	同上	初夢		
財斗	仲哥	仲哥	仲哥	仲哥	仲哥		
伊勢海老かます	餅	歯固	初暦	歯固	餅		
門松	注連縄	大かがみ	一のとり縄	門松	注連縄		
松のうち	一つとり外	梅かざり	花餅	松のうち	立松		
餅	藁	掛鏡	棟	葉	蓮	根	
親子餅	紙巻山芋	白	同法久里				

紀事 元和夢さめ大三十日の歌ゆ元日の晴ゆ雪の花ゆ初夢ゆ元日の雨ゆ元日の風ゆ元日の雪ゆ元日の月ゆ元日の星ゆ元日の鶴ゆ元日の亀ゆ元日の人ゆ元日の馬ゆ元日の犬ゆ元日の猫ゆ元日の鼠ゆ元日の牛ゆ元日の虎ゆ元日の兎ゆ元日の龍ゆ元日の蛇ゆ元日の馬ゆ元日の羊ゆ元日の猿ゆ元日の鶏ゆ元日の犬ゆ元日の猪ゆ

初鴉 同上 [illegible] 初夢

初暦 歯固 雑談抄 凡暦を賣る冬より改年初て見西行

歯固 餅 世諺問答 [illegible]

花の春 花の春 [illegible]

妻駒 故事要言 去年の始め馬をつくりて [illegible]

俳子 小屋原 龍前奠賣 和漢三才圖會 拾芥抄 天王寺の民家毎月の上旬米の穀を用いて [illegible] 破魔弓 世諺

料の物 新の子 雪の花 [illegible] 問答 蚩尤の眼の瞳を拔く太丁の玉 [illegible] 河嬴身 歳旦一種

ちらき豆 牙斗房 [illegible] の瞳を除く又一説魔を破る [illegible] 羽子板 胡蝶板

もちひ帝 にし者 [illegible] 世諺問答 [illegible] 初子の日

押鮎 腹赤 [illegible] 子の日法遊 子の日の松

かけ鯛 若餅 [illegible] 雲林院菅家文章 予亦嘗聞于故老曰上陽子日遊獻

初暦 暦すり [illegible] 老又曰倚松根以摩腰習風霜之難犯也 拾芥抄 [illegible]

きぬたうめ [illegible] 日岳登る [illegible] 陰陽の辭を得煩悩を除くの術

練岳 初弓 [illegible] 扶桑畧記 宇多天皇寛平八年閏正月六日有子日宴行幸北野

馬素 初船素 初 [illegible] 初 [illegible] 初 [illegible] 初 [illegible] 初 [illegible] 初 [illegible] 初 [illegible] 初 [illegible]

彈 初 松囃子

初春　初夢　初荷　初硯　初空　初書　初日の出　初子の日　初寅　初子の玉箒　初卯　初天神　初子勅　春楽　初演劇　北日正月

子の日遊之圖

始春の初子乃今日乃玉箒
手に取れば初子乃
勅旨乃玉箒

家持

春の野に出て若菜つむ
我が衣手に雪は降りつつ
光孝

初子の日の小松を引き寄せて千歳の春の色を見るかな
大江

初寅　紀事　正月初寅の日神宮の御祭礼あり

造り田家正月子の日に蓬餅を搗き初るとあり

初卯　正月初卯の日持ち合せの社へ詣でる事あり

初子の玉箒　袖中抄　玉箒とは蓍草と云草を子の日の小松を引き寄せて箒

初春　立春　春たち川

明の春　唐代の春　君の春

子代の春　子の日の春

四方の春　宿の春

三の春　三の名

三のすゝめ　若夷

歳徳　東方朔

門の神柳　星を祭る

懸想文

年賀　大黒舞

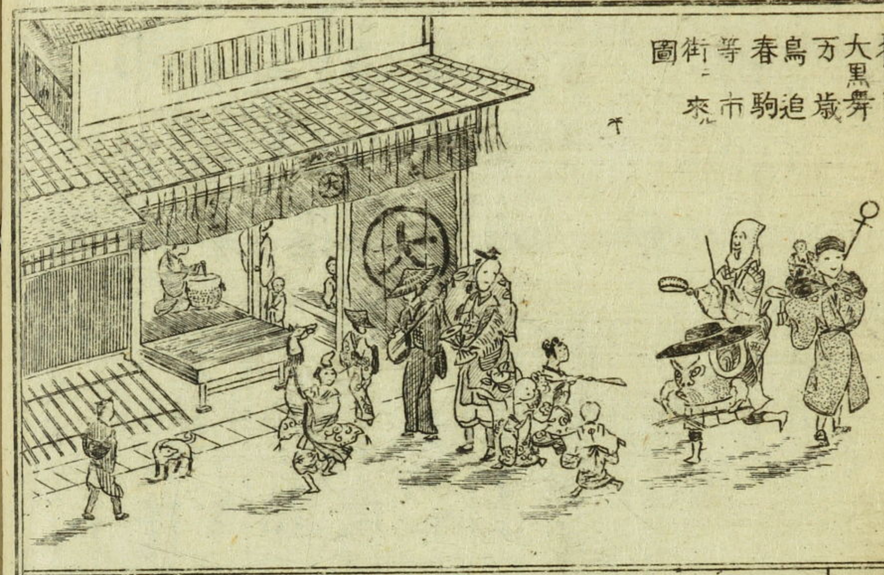
棧敷　寿

春の鶴　鳥辺山

ふるとく　鉄打

初天神　初子勅　北日正月

萬



猿引
大黒舞
万歳
烏追
春駒
等市
街
圖

男女ともに直垂ハ旦那人ともに直垂芝居のもの〜まで芝居ハ今年ものく演劇興行するを云

○本義ハ上の圖を略し古今名家の句掲載も元禄時代の句

遷葉と呼ぶ伊勢のけん便　苔蕉
元日や雪に咲く遷方の花　蘆雪
年ごとに咲く遷方の花哉　仝

天の戸ハ初日の出ハ初日新
法華経　人もろ〜ぎ始る都
七夕や祓の紙の片手ぶり　栗丘
茶戸ハ神に供ぎ餅の玉　吹喜
けり　餅や　餅の花の咲　芭村
猿ぎ　餅の花の咲　杉宝
猿ぎ　餅の花の咲　大祇
猿ぎ　餅の花の咲　完来

明治ニ来ル
明治八年太陽暦改正ニ依

年ぎ　世の礎や日のもと
横文字のめでたき時代の春　文海
すゝ来るもの　雪月の芳　梅岡
雪月の芳　梅岡

玉祈
七宝矢
福引
乾坤
初子の日
初演劇
七日正月
上元 十音
元夕 小正月
かゆの木 この日せーら
左義長

破广号
宝引
三ヶ日
月ノ吳名ハ都ヲ下ニ出シ略之
子の日遊
卯つち
乗物
人日 七日
十四日年越
元夜 元宵
粥杖
注連の内
爆竹

四季作詩歳時記所収草

春永 初春に之春の季 畑打 畑を耕す 田を起す 初漢三文圖會

雨 礼記 春宮太子東宮也 天文 呉行の国を孝子ハ代の色ハ春 春宮

春駒 春の駒 春の宮 春の駒 春の宮 春の駒 春の宮

春の水 春の水 春の水 春の水 春の水 春の水

春の山 春の山 春の山 春の山 春の山 春の山

春の川 春の川 春の川 春の川 春の川 春の川

花 花 花 花 花 花

人丸

伊勢物語 春の水 春の水 春の水 春の水 春の水 春の水

万葉 春の山 春の山 春の山 春の山 春の山 春の山

業平 春の山 春の山 春の山 春の山 春の山 春の山

春の水 春の水 春の水 春の水 春の水 春の水

春の山 春の山 春の山 春の山 春の山 春の山

春の川 春の川 春の川 春の川 春の川 春の川

花 花 花 花 花 花

人丸

春の水 春の水 春の水 春の水 春の水 春の水

春の山 春の山 春の山 春の山 春の山 春の山

春の川 春の川 春の川 春の川 春の川 春の川

花 花 花 花 花 花

人丸

春の水 春の水 春の水 春の水 春の水 春の水

春の山 春の山 春の山 春の山 春の山 春の山

春の川 春の川 春の川 春の川 春の川 春の川

花 花 花 花 花 花

人丸

春の水 春の水 春の水 春の水 春の水 春の水

春の山 春の山 春の山 春の山 春の山 春の山

春の川 春の川 春の川 春の川 春の川 春の川

花 花 花 花 花 花

人丸

春の水 春の水 春の水 春の水 春の水 春の水

春の山 春の山 春の山 春の山 春の山 春の山

春の川 春の川 春の川 春の川 春の川 春の川

花 花 花 花 花 花

人丸

春の水 春の水 春の水 春の水 春の水 春の水

春の山 春の山 春の山 春の山 春の山 春の山

春の川 春の川 春の川 春の川 春の川 春の川

花 花 花 花 花 花

人丸

春の水 春の水 春の水 春の水 春の水 春の水

春の山 春の山 春の山 春の山 春の山 春の山

春の川 春の川 春の川 春の川 春の川 春の川

花 花 花 花 花 花

人丸

左義長爆竹之図

網引	北日正月	店卸	帳書	一永
春寒				

ⓘ 女叙位

日本紀 持統天皇五年春正月癸酉朔賜内親王女王内命婦等位

二宮大饗

公事根源 正月二日王卿以下二宮に参て拝礼ありて二宮より東宮中宮の御車所に

庭竈

紀事 火鉢を竈上に置家内むかしは竈を竈と云 世間節用 光禄五年印本

ⓘ 蓬莱

餅の具に四季彩色出しかつ賜る 列子 渤海東有山一曰岱輿二曰員嶠三曰方壺四曰瀛州五曰蓬莱華実皆有滋味食之不老不死所居人皆仙聖之種云々蓬莱盤

懸者

時孫曰毛彩ち幅半に似たり彩

星佛

滑稽雑談 歳暮の星の九曜を年の物に要る

蓬莱之盤

懸蓬莱

徳俵

莫鳴菜。本朝式 奈々里曽神

寶引

福引。

兼三春物

菠薐菜

四月蓋を起し

曙　水ぬるむ

永日　遅き日

遅き日　佐保姫

春色山笑

東風　春風

木地炉緑　春水

春光如　春日遅

菜畑　菜畑

蘭　梅　連

梅枝　梅枝

梅花　大芹

植物類

子日の松　小松引

七種　薺

仏の座　ほとけのざ

すずな　菜

すずしろ　蘿蔔

ごぎょう　母子草

ほうこうな　蓬

蘇生草　蘇生草

子代の菜　子代の菜

根白草　せり

ほとけのざ　ほとけのざ

ほうこうな　蓬

松はぜ　松はぜ

下萌　萌

蘇　ほうこうな　蓬つけれ

四季作皆歳時記所采草

尺たるものをもかりて莖を結きて
ちかくに幻色のみなりく 防風 紀漢三才圖會 子嫩き
極めて口なるやうに五月 時珍曰 味甘之和羹食
花咲きて陰室をもまぶ

ご 歳徳神 喜方柵。

紀事 陰陽家来年の支干に用て四方の向吉凶を考へ
ものを得方に行也 箭籠内傳 歳徳神は頗婆女訪
謂八将神の母なり云 桃符 桃板。 桃梗。仙木。神茶 鬱墨。 淮南子 羿、
許慎注云、梗、大枝也、桃を以て人を作る以て羿を教へ
殺もの也 桃梗を畏る 以来鬼桃を畏る 今の人桃の梗を
拭を作り家内に門へ掛て鬼を辟る 桃符を作り家内に門へ掛て鬼を辟る
六帖 元日桃符をつくる 戸に着くもれを仙木と云
百鬼のおそれ 風俗通 東海度朔山に桃樹有り
ほうこうの 三子皇に生れ 東山に鬼門
云二の神 神荼鬱壘 云 鬼出入軌を以て虎に
謂ふ 故に於て美斉法 長多 桃板を門戸の上に立つ
トシタチ

年立かへる 後の再ひかへる 来年立春 年男 新年の
事を云 人をいふ

鳥追 雍州府志 元旦の人元日より十
五日に至り笠を着白巾を以て

面を覆ひ笠を於て祝儀を唱へ門に立て米銭を
用鳴の鳥を追ふ 敲の子二郎と号し又追ふ事也 民間
辞令 ものをくまき子を結ぶ 三積り手根 古薑 蓼葉の形
小類也 俗に野老と 鰹を以て海老と 赤豆 嘉祝
社食物 ト云 年玉 新年の賜を云 左義長の条に出
ト云 蘇 十之分の花 飛鳥 梅の郷に作出也
蘇 松の条に出

ち 朝拝 朝賀。 奏賀 奏瑞。小朝拝 公事根源 元日
辰の時 天皇
大極殿に出御の時行幸群臣礼服着用云
奏賀奏瑞 去年の月出度 奏瑞 国郡
中上れる 只下の元日 天子を拝 今日奏賀 小朝拝
徳く行 延喜五年左大臣 年云 行幸 止 也
同十九年又元のごく行也 行也 ことあり
朝覲行幸 公事根源 天子年の始 上皇并母
后の宮に行幸 行幸 嵯峨天

蕗の薹 ふきの花 ちゝめ

若菜 古草 菜蔬

野大根 菜のもかさ とうなの草

梅 野梅 好文木 梅ちゝみ 春告草 白菜

松乃花 若ちゝめ 及ちゝり立

種まき兎 畑ゝ

十ゝの花 若ちゝめ 若菜

畑打 多蒙見草

田をかへす 白梅 やまと梅 との花 花の兄 学士梅 飛雪

皇大同四年八月朝覲の儀始る 嘉祥二年正月廿五日 仁明帝の母后に朝覲のため行幸ある 院に行幸ある時 南殿を下りて筋を正しくして跪ひしるも 周徒く喜び年朝し秋日ふ親もとゝ人ら見給親 の意 ちゝ

子代の春 子代の初春、又百世美代 ふる歌につゝくまり

帳綴 帳書。紀事 正月四日諸蕃人等を路むに元度中の 簿冊を載渡を 書法多くは初寅の日を

以も

り履端 左傳 先王之正時也、履端于始、举正於中、帰餘於終。○元日を云ん

両の物 小豆粥 名義未詳 類聚国史開牛蒡 の両種を古者菓子 の膳の左右に置く 多蒙見草

臨時客 年中行事歌合 正月二日臨時

盛物を云歟 又料の物を云 客とは関白家 客の初め大臣以下の上達部を招て題 けるとは定まれる 勢も何ゝ陪膳客 付るや大方大臣の母屋の大饗は年毎に行 す 鷹網あり 酒しるの興なること

履新を慶 季吟曰履端はしるを改め行 年の始を慶て賀する心なり

領する心 改年の祝 履新も同じ

大服 大服とは点茶の名なり 紀事 元式茶 を点し植梅山椒を茶碗のうちに

御降 元日 雨を云

押貼 玉篇 具多貼は年毎に年長ずる 新 年家祝の 食

女王禄 昔は女王に禄を賜ふ 令義解法人別二疋絁云々

男踏歌 江次第 踏歌 公事根源 云女王禄と字を書く 女の字を略するを口傳 十五日に光仁天皇の時 男踏歌の 十五日に光仁天皇の時 男踏歌の 十五日に光仁天皇の時 男踏歌の

雑談抄 云村上天皇の時 亦賀客を歌も○季吟曰元日大 てはの腦年 書 ちゝ 又

岷江入楚 天武天皇の時始る。聖武天皇の時 行 又曰国語院天元六年正月十四日男踏歌

柳 青柳 川柳 玉すだれ たゝり柳

蓬 箱柳 白楊 蓬柳 めすの柳

椿 柳のうゝ 柳 風見草

桃 玉横 白玉楼 仙女桃 ちゝ桃 飛入つゝ紀

山葵 聖老姥 慈姑

芋 鳥 芋 苣

芹 独活 川ちゝ

防風 雑菜摘 山にんじん

生類

猫の戀　書て猫　猫と書て

白魚　魚氷に上る

懶魚を愛　百千鳥

鷲　黄色白い色

夷鳥　夷鳥

金衣　金衣

鸞　雲雀の琴引

雲雀　雲雀の琴

鴛鴦　鴛鴦

多賀へづる　鳥さかる

鶉　鶉

蛤　蜆

何も以後中絶ス　西宮記　古語ニアラレバシリと續キ曲の終ニ著キ事アラレと云祝言を必もちゐし納る歌ニアラレバシリと云〻〻　花鳥余情　男踏歌十四人なり殿上地下の四位以下の輩ともに男女を分てめぐりて備る事を云舞ふ事なり〇男踏歌の女踏歌の事備事なり　河海抄　踏歌人の遊花を以て冠の纓に挿かざす人なり　細流抄　ちんたり〇かざしの緒ハ

歌　公事根源　男女声をそろへ歌を謳つゝ手始の拍子など張り舞を舞ひ手を天武帝の時始まる

女節分　疫神祭を去る　吉田法師の事とかゝはり

薺蒿摘　和名抄　薺菜一名蕣蒿、和名於八末　崔禹食經　状ち芥草に似て香むし　夫木　久かたの中なる雪の白のおもかけ　美濃なる　はつ春の野に摘てこれを食ふ　雪の白のおもかけ　住吉

若小　公事根源　梅の緒　井開。井おもて。つゝ井。

わ

何も茶屋

衣食類

福　沸

七種の粥　齊かゆ　鏡　開

臭足饒割　節振舞

小豆粥　町汁

鶴の庖丁　北日園子

蕗　蕨　干大根

干　芸　子日衣

鶴之庖丁

井ハ清水ニ蓋をして立春ニ汲れ井ニ蓋を開ク　**若菜**　初若菜。

公事根源　内藏寮并内膳司ニ正月上子日ニ若を院ニ七種の若菜を寛平年中ニ始る延喜十一年正月七日ニ後供ス七くさの若菜を食ス

蒼鞠ニ載る雪ハ天の紙符若菜ハ若夷ハ簡素ニ近世通て年〻夷ハ俵俵物の象ニ出し

若餅　小餅と云ふ小の緒を結て若と云　又一説歳旦ニ搗を若餅と云

若草　新草。之種ニ初草。草初生を云　**若緑**　水草　松二三月　雑　抽んて花を生ル長四五寸ニ成ル是緑を云ふ也　松緑柳緑ニ成ル色ニ成ル

三春物

山葵　大和本草　加茂葵ニ似て葉ハ姜の形ち山中水ニ近き石ニ生ル

何ノ人家ニも是を移し植る云ふ七月種を下し細ニ成る黄白色ニ咲く

神棚　季吟曰在家の書ニ棚を神人神を祭る夜ハ燈を供し付る事ハ古義ニ成ル

か

門の

柳　衣　梅　雲　衣
干　鱈　酢　蛤
春ぬる　赤の芽漬
山椒皮　鹿　尾
海　雲　若和布
海　苦

北の海苦　海苔の事
鶯宿の黒豆煎
奥津海苦

神釈

祇園削掛　時日國所ハ下ニ委ク注シアレバ略之　毘沙門功徳經
船玉祭　天狗宴

箕面富　玉ぎぼし（ハコサキ）
饗かへ　住吉初卯
菜摘川神支　御齊會
御修法　大元師法
嚴島祭　厄籠
十日蛭子　住吉御弓
子星法粥　三保祭
常陸帯　摘り礼切
御ゝ祓神支　御忌
吉田法稜　女節分
厄神祭　蘇民將來
初寅　奮おろし

門の禮帳（カドノレイチョウ）　明世說新語　京師節日士人皆出賀惟置白紙并筆硯于扎賀客至記其名迄五節供出以賀客帳

懸鯛（カケダイ）　紀事　元日ノ朝一双ヲ藁縄ニ

數の子（カズノコ）　本草　雛の子ヲ正字鰊　鰊月歳始及ビ婚家以温疫彩者ヲ避ケ以

搗栗（カチグリ）　和漢三才圖會　搗乃訓ヲ勝トカク諸説頗多ク規祝ノ者ト反ニ

飾海老（カザリエビ）　紅鰕浴ニ作ル鰕ト云ヒ或ハ縁倉鰕ト称シ賀祝乃

飾炭（カザリスミ）　本草綱目　白炭除夜立之戸内亦辟邪氣ニ云ヒ義アリ

注連飾（シメカザリ）　かざり縄。世諺問答　志め縄ト云ヒ左ノ如キ藁。縄ヨリテ縄ノ中ヲ捲ヒ抜ケ

門松（カドマツ）　立松。かざり。

世諺問答　松ハ子年ヲ契リ竹ハ寅代ヲ契ル故モ子年ノ春ノ代ヲ以テ用ル

一月一日花餅　祝服着用御慶之図

○輓近練尾家ニ飾ヲ造ル事候ノ者ヲ以テ門形ヲ造リ戸前ヲ飾ル之レ則花餅ト云フ

一月一日のかざり花ハ梅松柳　猫柳　水仙　福寿草　南天　千枝の遠乃ゝ橙　蜜柑　橘　を挿ス頗美麗ヲ尽ス　開業式及諸事祝日ニ用ヒ

門飾の順序を以テ一月之部ニ花飾ト記ス

粥木（カユノキ）　粥杖。うちけら。　紀事

信濃、飛騨、三河、のミ用ヒ漆櫨の木ヲ一尺二寸ニ切リ上下ヲ削ル者ニ左巻ノ如キ

公事故事

繪踏

二宮大饗

或ハ柳櫻花のかたちを紙ニ切り粘して松烟ニ [illegible]

[illegible] 祝棒と云 新婦 [illegible] 男子を [illegible]

乃戯 [illegible] 粥 [illegible] 餅を入れ [illegible]

獺魚を祭ル

【礼月令】孟春月ニ獺祭ル魚ヲ 【埤雅】獺取鯉ヲ於水裔ニ四方陳ル之ヲ進而弗食也謂ニ之ヲ祭ルト魚ヲ蓋祭ニ其先ヲ ● [illegible]

霞

【和名抄】唐韻ニ云 霞ハ赤氣ノ雲也

【兼三春ニ物ヲ】 芭蕉 [illegible] 瀬田の奥

和加須美 ● 氷邦 [illegible] 漢土ニ [illegible] 靄の字ニ [illegible] 霞の網 【仍傘】 [illegible] 霞の洞 [illegible]

[illegible] ● 霞の海 [illegible] 【古今】 [illegible] ● 霞

[illegible] 行平卿 ● 霞の袖 [illegible] 霞の衣の [illegible]

[illegible] ● かすミ酒 [illegible] 霞 [illegible] 流霞ト 【抱朴子】到ニ天上ニ仙人以ニ流霞一盃ヲ飲之ヲ 【書言故事】天仙酒名

● 霞の波 霞の沖 [illegible] 霞の命 [illegible]

元始祭	朝覲叙	女叙位	女王祿	御歌會	外記政初	御薪	男踏歌 女とうか	內宴	春盤	桃符	神荼鬱壘
臨時客	位	縢	白馬節會	御弓	縣召	踏哥	[illegible]	葭灰飛	生菜	桃板 仙木	天穿

[illegible] ● 八重霞 【八雲御抄】

[illegible] ● 九霞 [illegible]

霞の洞

【仍傘】 真浩ガ詩ニ萬里洞中朝ニ玉帝ニ九光霞内宿ス仙壇ニ [illegible] 仙洞 [illegible]

霞のほとし

契沖曰 [illegible]

鐘かすむ

[illegible] 鐘声

陽炎

【簸廬輪】陽炎 [illegible] 二名也 [illegible]

鏡草

大内 [illegible] 【鏡餅】は 鏡草 [illegible] 歯固 [illegible] 【鏡弄】く [illegible] 具足鏡開。 門乕、川乕、風兒草、柳の [illegible]

春

[illegible] 春の

宵の年

去年 [illegible]

よ

四方乃

孝明天皇祭

○二月之部

乾坤

二日 灸

朧月 おぼろ月 朧夜

初霜光 初霜

出出〜雷

芝居二の替り

社日

風

植物類

初花 花待

催花 初櫻

吉田清稜 紀事 正月十九日大稜面年夜之吉田ト称家新年の行事切り齋

蘖蒿 野園家園之分川辺を目びぎして叢生せ

大黒舞

貧船数 大三十日夜元日ならるの

櫻 櫻似抽而小者也 和名安倍太知波奈

倩子 糸切歯 倩子ハ五万米鯤ト

田作 小殺

店卸 商家客年中之金銀出

大元師法 公事根源

糸櫻 彼岸櫻

姥櫻 児櫻

熊谷櫻 枝垂櫻

紅櫻 未開紅

八重櫻 彼岸櫻

戦中櫻 産論櫻

黄櫻 接木

はぎ種

五加木 接骨木花

鴨御花 苗代茱萸

苗代 あけぼの植

種蒔 種子蒔 種おろし

蓮根 掘 蓮 根 掘 蓮 根 掘 蓮

生類

雛　子　雛鳥　行鳥　去鳥　鳥屋籠　鳥の別屋の子　貝鳥　かほよ鳥　はこ鳥　松虫　鈴虫　子雀　雀子　親雀　雀の巣　引鶴　引鴨　鳥の巣　鳥の旧巣　朝鷹　白尾の鷹　継尾の鷹　佐保姫鷹

書を猶。雑談抄 此着陰獣なり然を陽春年中犯さるを交合を好む是を猫恋と云

子日衣（ネノビコロモ）

何そも子の日始る　子日始は㊐　着用の衣を云　子の日の出

な

菜摘川神事（ツミカハノシンジ）

神社啓蒙 勝手明神の社 大和国吉野川辺にあり 所の神一座受髪神と云毎年正月七日此社の神人氏子の男女此川四五町若菜を摘勝手明神の神供とし祭祀をなす故に菜摘川の神事と云

内宴（ナイエン）

公事根源 内宴とは内裏くの節会なり仁寿殿に行る文人ども詩を作り御前に講ずと云

七日正月（ナヌカショウガツ）

人日。旧俗に正月七日を五節句の初とし七種粥羹をこしらへ祝義也 東方朔占書 正月一日を鶏二日を狗三日を猪四日を羊五日を牛六日を馬七日を人日と云 ● 人を帳に貼も 荆楚歳時記

七草粥

正月七日七種の菜を羹に入る七種とは松蘿蔔芹薺菁荒鞠蘩蔞、

伯鷹　伯符　鈴鹿山多符　鷹化して鳩と成る　蛙　蟇　青蛙　蛭子　蚍　蜂　似我蜂　蟻　社巣　蝶　揚羽の蝶　蛇穴出ル　石龍出ル　地虫穴ヲ出ル　冬虫　夏虫　馬刀

四季 井諸歳時記新栞草

柳塵、七種是也 世説故事苑 七種の菜を羹にして正月七日食べ門を打て水を撒く鬼車鳥渡る家門を打て水を撒く

てんれをてんれをてんれと和俗七種を打て云唐土の名ぞ日本の古地へ流れ来れり

板をうつは鬼車鳥の歩くなり中ごろ稼人あり 太平廣記 鵠鶏は即鵠なり一名姑獲一名乗雄女又は鬼車と名つく妻夫の交接陰時に遇へば魂魄を攫取て過くだもし人家に入り人の魂魄を攫も或は云常血を滴る血を滴らす家は凶殺有

ら

袁白連歌（ウラシロレンカ）

雍州府志 北野社三月四日素白連歌あり元連歌懐紙四枚あり中古能筆歴て片面を続て記す是なり

流例とあり故に一枚を二人宿老有

公事根源 御杖とは持統天皇一四月卯の日大学寮にて是を献ずるなり日本紀に又仁寿三年正月之

卯杖（ツヘ）

卯槌。

旧説に唐祝杖を献して粉魅を祓ふ云 雑談抄 今世卯杖と加茂氏家へおくるは一尺余りの木を白く刻て三光院御説に卯杖卯槌四物なり上を中の悪鬼を

蜂	毛孔出	
初蝶	蝶飯	蝶
雛子ゝ子	鹿角菜	
厚菜		
衣食類		
治聾酒	蝶贈	
蓋蝶		
神祇		
水間祭	本妙寺祭	
摩耶祭	東福寺懺法	
吉野餅配	八幡初卯	
大原野祭	行基參	

奥氷上ル 月令 孟春之月、魚上氷ニ 孟春發端の春を奥にして奥

拂ふ 去る

泳き出して 泳ぎ出して

梅 和名宇女 潛確類書 梅四德を具す 初生の蕾は元亨利貞 開花は

亨ハ 四貴 四貴 貴いて 嫌さ 貴いて 貴ひて 貴ひて 貴ひて

梅樹 梅樹 人 人 人

菱繩所供 道明寺祭

水口祭 献生子

公事故實

季御讀經 列見

釋奠 祈年祭

紀元節

又一株の梅折り枝地に横たはりて臥たる[illegible]し故に臥龍の名あり ○[illegible]の竜をつくも花守の[illegible] 嵐雪

[illegible]への潮に[illegible]梅の[illegible] 香山 ● 梅暦 梅ハ是山家ノ暦、山中[illegible]梅の咲をみて春を知ると云意そ暦とす[illegible]

梅花衣(ウメノハナゴロモ)

[称念院御抄] 梅重 表濃紅 裏紅梅 [illegible] 白裏 蘇芳 自十二月至二月 云々

鶯衣(ウグイスゴロモ)

鶯袖 [藻塩草] [illegible] 少し[illegible]の濃き[illegible] 衣の袖を東少し[illegible]と云 衣の色[illegible] [illegible]て表[illegible]

鶯菜(ウグヒスナ)

生じて二三寸ばかりの[illegible]

鶯(ウグヒス)

[詩経] 出自幽谷遷喬木 [古今集] 鶯の[illegible] [諸山記] 正二月に[illegible] [和漢三才図會] [illegible] 人の舌鼓[illegible] [illegible]立春に[illegible] 清亮 [illegible] ○[illegible] [古今序] [illegible]

[illegible] ● 金衣鳥 [開元遺事] 明皇[illegible]中に於て黄鳥を見て金衣公子と[illegible] 故に金衣鳥の名有 ● 黄鳥 詩に[illegible] ● [illegible] ● 人来鳥 ● 白[illegible] ● 春告鳥 ● 鶯 鶯の[illegible]

鸎(ウソ)

[和漢三才図會] [illegible]

麗(ウラヽカ)

[兼三春物] [杜詩] 遲日江山麗 ○ 美麗、花藻、妍麗、[illegible]

獨活(ウド)

[本草別録] [illegible]

[東白①] [illegible] 謡初 ㊉ 松囃の[illegible]

㊈ 熨斗(ノシ)

[下部古事記]

三月之部

乾坤上

上巳

桃花之節 桃之節句

雛祭 雛うりさま 雛[illegible]

立雛 坐雛 内裏雛 抱雛

柳太刀 柳のえだ

潮干 土佐の潮見取

曲水 めぐる水に盃を流す

巴字盃 羽觴を流す

八十八夜

忘霜 別れ霜 名残の霜

紅毛下向 初虹

爐塞 巨燵塞

曲水之圖

曲水ハ河の辺に盃を流し其角
酔て桃李の詩人と題しけるにや
惜花不掃地
亦奴藤葵新録許しけり

野大根（ノダイコン） 西土のふた大根相にて大根なり

天照太神伊勢国五十鈴川上にて神代の人形を作り給ふと云 打鮑の事也

海苔（ノリ）

[説文]苔水衣水土潤氣所生在水僊 ●青海苔 紫の帛の如く多く生る伊勢の産を最上とす ●甘海苔 武江品川の辺にて採る最も瀬の石上に生る是三四種あり紫色を以て最とす俗に神仙菜と云 ●浅草海苔 佳味なり ●於胡海苔 海中石上に生る乱髪の如くにして青色之東海に多し ●桜海苔 丹後の国海岸に産す色紅白桜の似たり旨し桐属も雄味なりに浸し是を食ふ ●素麪海苔 長くして色青黒し 海髪なり是 ●鶏冠海苔 其状鶏冠の如し紅色にして石につきて生る ●黒海苔 若狭の海中に生る朧月これを取る[貞享式]此の名は越の名産にて海辺の岩間に積る雪を波の打浸す様子にて瀬りて海苔と呼ぶ ●与津海苔 廣さ六七分長さ五寸ばかり 頗る厚し色紫なり ●葛西海苔 越前の産 ●十六島苔（ウツプルイ） 雲州の産其海苔の類なり

㊉ 御歌會始（オウタクワイハジメ） 明治年間

にて行はる宮中の例にて御題を布告し人民にもこれを詠して宮内省へ上進することを許させ給ふ例なり

一月十八日を以て行はせ給ふ 主上皇后名貴官など吟詠新年の記載も詳に遠く向ふ一月三十日を限りとす

本草

㊇ 元日（グワンジツ） 元朝。三朝。

[玉燭宝典]正月一日為元日○朱子曰元大也始也

[尚書大傳]正月一日為歳之朝月之朝日之朝故曰三朝

[鮑宣傳]元日歳之始月之始日之始故曰三始云々

國栖奏（クズノソウ） 国栖笛。

[日本紀]應神天皇十九年冬十月朔幸吉野宮時国樔人来朝之因以醴酒献天皇而歌之云々[延喜式]諸節会に吉野国栖[国栖十二人笛工二人但笛工二人山城国綴喜郡ず]の国栖御贄を献し歌曲を奏する節会に十七人を以て定とす[江次第]国栖の歌笛ハ兼明門の外に於て之を奏す

串柿（クシガキ）

[酒陽雑俎]柿に七絶あり一つに寿六に嘉賓に今新年を祝の物として蓬莱に用ゐる此義なり

蓴蔓（シタチ）

[本朝食鑑]蓴立ハ久久多知と訓す蔓菁の叢二三月に至り薹肥大す叢立

具足（グソク）

[記事]凡鎧に云具あり悉く具足すると謂ふ是具足の餅と云具足の餅は特に刀を以

鏡開（カガミビラキ）

かくてや 霞 弥生山

竹 秋 夏待

行 春 夏 降 暮春

春の限 春の別 かへるまま

三月尽

植物類

桃花 白桃 緋桃 源平桃 ひとへの花 こち世桃

櫻 花ざくら 遅桜 八重さくら 山ざくら 緋ざくら 江戸桜 家桜 浅黄桜 西行桜 有明桜

花橘 ミカン

(古)

木社幸さ汁も勝ち 橘 ろの 芭蕉

故主増ゆるの庭前て

さ(ゆ)くの十年ぶりかな 橘 我 公

時雨や 橘 さかの 奴 山ろく 甘 南

花ろ ろ 元 ぶ ろ し 高 橘 嵐雪

茶 守 や ら き か ら を 実 ろ も 去 来

ゆ か く と 来 て い る 兄 の 前 ろ 右 我 丈 草

ぶ ゆ 時 ろ 日 ま く て ち 兄 ろ 野 坡

ち ま ぶ く ゆ け ま を 花 の ま ち し 我 貞室

ち ま ぶ く ゆ け ま を 花 の ま ち し 我 信徳

(中)

花く 赤ろ く 高 ぶ 紙 ろ 白 ろ 乳 芭村

写 ま き る 花 盛 人 の ま ろ ち 年 士朗

山 や 花 ま ち く し 記 杖 の 先 冥 更

ま る ち と 転 く ち の 伝 し 花 の 書 嘘 去

花 ま 来 く 時 く 翠 し 廊 ろ 郎 参 札 山 時

む の 杖 入 ま 風 と か ま ま ろ り 蛇 高 室

ろ と あ く 花 ま ま ろ り 峯 の 雲 橘 室

月 代 や 橘 ま 風 の ま し て 一 呉

人 悪 し 竹 ま ま 紙 を 橘 ま ま 白 雄

山 涼 く ま く 甲 賢 竹 ろ 遊 ま ま 禾 木

青 の ま る ま と 詠 ま ろ り 川 橘

面 ま 新 ま い 拭 ま ま 冷 ま 墨 ま り ま 祖 仙

て截とを晨む故ゑを以てし掘を以て是を殺りかくこ墓を貴して縊ぎきとゝ彩年截の字を忘故あり

藏開 雜談抄 和俗年の始ゑ藏を完く一切の賀戦を厳謹用に充て奏買の事を要ま是新年蓋年ニ

偶偶師 夷四ゝまゝ云橘 西の宮より参る者て一説ゑ夷ゑ殿歳の始ゑ流生ゑ笑ひをし以終ゑ時ゑ富貴を幸らんとの託宣ゑく苦より妻の物都を始め方ゝ偶偶動もゑ

食摘 今の俗語て蓬莱畫食結ゑ角一ゑ

白作ゑ ゑ ゑ

画の花織物花

花見 花守

花の雲 花雲

花の雨 花の雪

花の風 花の波

花の宴 花の幕

咲きそろふ 唐なし

木蓮花 果桐の花

馬酔木花 庭梅

蘇枋の花 長春

石南花 沈丁花

花盛

菊の主 菊の宴

花の波 花の陰

吉野さくら

花曇 花車

花の絵 護摩絵

海棠

林檎の花

中に黒細き子を結ひ落蕊て繁き白絨のごとく風に靡く子衣物に着ハ紙出生ハ池沼に入て萍を

○柳 黛 柳の眉。美女の風姿を立て云ハるなり

○柳 川柳 小楊に手を望ハ

○柳 柳の枝を折ハ中かゝる

○柳 柳の髪

○柳 柳の眉

○柳 柳の枝を折ハ中かゝる

○柳 柳の枝を折ハ中かゝる

○柳 柳の枝を折ハ中かゝる

菜　搗　令　法

躑　躅　白躑躅　紅躑躅　岩つゝじ　連花つゝじ　深山つゝじ　浜つゝじ　石つゝじ

藤　春の藤　下り藤　夏藤　夜藤　夢藤　山　吹　八重山吹　蕎麦搗菜　仙臺萩　けぶんの茅　河つま菊　高麗菜　喜　菊　母子草　さゝらの茅

の両村より有る四田箱尾二所是也二月丑寅梵天へ参詣を千寿万歳と云ふ河内国業平盥歌を大江定基の作と又

河守を任じ給ふ時しるし紀貫民又佛教行業の因縁と数へ奉りしもあるべしこれ河内国業平の

町汁　紀事　法下の旧俗正月十日の朝自ら膳食を設く

奢く會所に出仕して此月頭人一汁を設く

これを汁會又十日汁と唱へ喫し吳て法令を禁

数人町中の男女此式を守る事九月九日も同様云々今

搗菜一名一月町汁と変ハ総代名主人組を他町を面々

集會し以て新年の賀盃を酌む是町汁の義因なり

義三春物

鱒　孫炎曰鱒ハ好んで独行す常に必ず其子を従ふ必

けぶんの茅　八重山吹　仙臺萩　河つま菊　高麗菜　喜　菊　母子草　さゝらの茅

人人素質赤章好んで螟蛉を養ふ

綱を結ぶ事を結ぶと云ふ

け

鶏旦　公事根源　是ハ吉日を定めて行

東方朔占書　歳後八日、一日為鶏旦

外記政始　法令の犬神人烏帽子を

日を定めて行ひ給ふ云々

懸想文　法令の犬神人烏帽子を

行ひ給ふ云々

九重の茅　七重卅　金仙花　金鳳花　石蒜　形喜　菜　蒯　丁子草　董　卅　馬藺　茅花　茗荷　菜毛み　若蒜　稚花　通草花　水蕗の赤　三月菜　三月大根　青麦　卅搗

四季非諸歳時記新撰草

掛乞文　由緒

懸想文之圖

こ

元始祭　明治八年太陽暦改正の後此官祭ハ

皇国一般戸毎門記に国旗を飜し奉

祝詞　嬰子の若葉　蘊頴圖經　嬰葉今俗に呼て

人多く為く花を以て餅

ふ

福壽草　元日卅。福壽草を器に載て人の家に賜ふ事あり冬の宜し

又百日草と称す

船乗初

産初生

生類

雲に入　呼子鳥

帰る　鷹の巣

鶉の巣　時鳥の巣

蓼の巣　田鼠化ニ鶉ト成

麦鶉　ちびふ　麦まき

鮎　小あゆ　鮎汲

乃方鮎　柳葉魚

鮠　橋鯛

さくら貝　さくら貝

鰇　蚕

かいこ　蚕子

船始　俗ニ船霊神を祭り以て船神を乎ム

船祭　正月二日船酒饌を供し以て船神を乎ム

畚　初寅詣　毎月寅の日に毎月此日鞠る近辺西の山岩ニ登り山構を構へ手ち縄を引き簀を

卸　卸き　卸き　卸き

蓬の餅　蓬の餅　母子草

桃の酒　茶の試

かぎ茶　きく菜

桜　衣

山吹　衣

神祇

巳日祓　頂戴の祓

經供養　石山祭

粟津祭　一条大祭

水尾祭　賀茂祭

高雄法花会　吉野會式

礼拝講　一切經會

善導忌　壬生念佛

兼三春物

駒鳥　和漢三才圖會　正字未詳　女声高活して長鳴　ムカムカ　云

大和本草　形い雀に似て大きい百舌鳥の如く頭のんどはまだら紅褐色

東風　東風謂之谷風　注谷風五穀　小松引　好文木　初子の日の条出

養育意也　春晴而風曰光風

兼三春物

繪踏　吾山遺稿　肥前長崎、五島、大村、平戸、佐賀、筑前、男女踏ら絵踏ふませ邪宗を禁ぜしめ給ふ法

邪宗の佛像の描きなる絵踏

乙

恵方摘　家内草　芹の異名　法

梅の条出　田作の条出　木蘭原花

丙

天狗宴　紀事　正月二日京都　愛宕寺の牛王加持

也今東坊持家殿を集り宴飲を其座上に行ふ人院

[illegible]

兼三春物

駒鳥　和漢三才圖會　正字未詳　女声高活して長鳴　ムカムカ　云

大和本草　形い雀に似て大きい百舌鳥の如く頭のんどはまだら紅褐色

東風　東風謂之谷風　注谷風五穀　小松引　好文木　初子の日の条出

養育意也　春晴而風曰光風

乙

恵方摘　家内草　芹の異名　法

梅の条出　田作の条出　木蘭原花

兼三春物

繪踏　吾山遺稿　肥前長崎、五島、大村、平戸、佐賀、筑前、男女踏ら絵踏ふませ邪宗を禁ぜしめ給ふ法

邪宗の佛像の描きなる絵踏

丙

天狗宴　紀事　正月二日　京都　愛宕寺の牛王加持

梅若忌　勸学會

堂塔大念佛　法華会

人丸祭　御身拭

南　祭　稲荷山出

松尾山出　御影供

高雄女詣　順峯入

子本念仏　結番祭

公事故実

蹈　青　油　花　卜

鞦　韆　寺　仙　の　戯

寒　食　ぶ　ま　ち

杏　粥　東　の　餅

天穿　頂餅繁　軍文類聚　江東の俗正月廿日之号

也今東坊持家殿を集り宴飲を其座上に行ふ人院

[illegible]

公事故実

手鞠　年中行事歌合　云縣石陸月手鞠の御宮を宮と任せらるる任官を授らるる地上位の事

あ

縣石

除目　十日　年中行事歌合　云縣石陸月手鞠の御宮を宮と任せらるる任官を授らるる地上位の事

公事根源　名簿、名國帳、秋満、更任、任奏、延上、申上、数ふ

白馬節會　公事根源

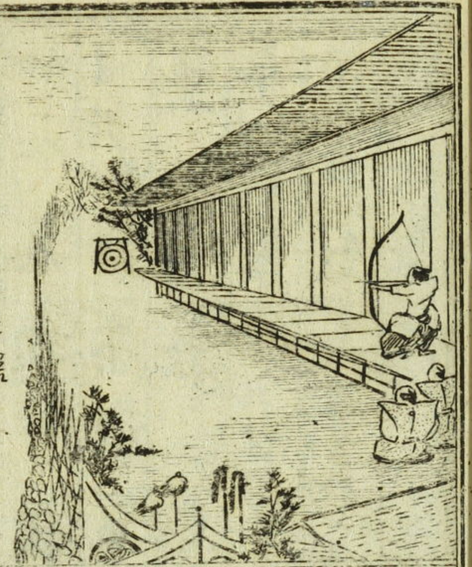
四季

小豆粥　世風記正

三春終

○四月之部

乾坤 立夏 梅 天和清天 卯花 短夜 ひゑき束 松前浸り 大矢数 蚊帳 紙帳 汗 汗衫 扇 日傘 団扇 笠 ふの子 洛東大佛 大矢数之圖



東ゑとの書うも 通るや大矢数
餅の下作も ゑくて 見ゆるなり 大矢数 蕉池

植物類

壮丹 富貴草 ゑくて草 北四卯 花の王 四季 菖蒲 藥

日十番小豆粥を奉て天狗の面めさ座中寧上ゑ寧り則ち御凝ると記東の方に向く再拝し服もれい疫鬼を嫌ふ

新玉の年 璞の祇とつげて年とゝふと枕詞あり 初春にてあらたまの月とゝ日とゝ又 **沫雪** 釈日本記 雪之脆弱

者如水沫故曰沫雪

葭灰飛 歳時記 立春日取竹為管取葭為灰

以葭莩灰実律之端暦者候気至則灰飛而管通以応六律

ひのさゝる 和漢三才図会 二字

兼二春物

青芥 本朝食鑑 茲に繁毛ひの繁深き者を青芥と云常に用

芦の角芦の雑 ㊀ 青芥 ㊁ 青芥若甘海苔 角ゝむ芦の采芥 御の彩者 ㊂ 海苔の彩

さ **三稜打** 又左義長。どんど。書き揚。爆竹。

十五日 徒然草 左義長は正月に打るぎちやうを云言院の神泉院につゞして焼ひるゝ法師の池とゝ

ゝもいと神泉苑の池を云 和漢三才図会 正月十番法

堂殿の庭おゝく書付を焼く以て吉書を天に上る十八日

する赤竹を飾を掛爪を結付清涼殿の庭に見せる

唱文師大黒打丈夫徒四人 三人三人 鬼面を被り赤熊の

髪を蒙り二張の太鼓を撃へ二箇の逐鬼を舞て

子二人まを面まる赤熊の髪を蒙り脳鼓をうゝ

軍文類聚 爆竹 神異経云西方深山中に人有長尺

余の人を犯し寒熱を病ましむ名つけて山臊と云竹を

以て爆中家く今暁爆竹を焼臊鬼を避る 紀事

にて爆竹を焼く 餅を門戸に置く 厠のうち

て爆竹を焼く 或云左義長の

道書の説者を試るの遺風也 是左義長なり 凡民間十番の

新年の飾松竹を焼て爆竹を焼る ○或云漢明帝正月十番仏経

ゝ云ゝの小豆粥を喜ぶ 乳を焼て止平止と

ゝ云ゝの小豆粥を喜ぶ 児童の戯筆を書ゝ書ゝ

猿曳 紀事 倭俗狙公を猿曳と云 又云猿引

毒縄を引く賣の家に献も或は猿を牽して

蕎子麦	美人草	立葵	著莪	八重秋	茶挽草	風車	山ちさの実	山ちさの根	芍薬
蕎子麦	美人草	立葵	著莪	八重秋	茶挽草	風車	山ちさの実	山ちさの根	芍薬

花の実相　花の若　加茂の日二葵　文祐草　麦苅　茶せん草

けしの花　葵　ふしぎなる　麦門冬　麦苅　茶せん草　紫蘭　うつぎ　千日紅　芍薬

既の後をあそぶ是る擂神　冴へかへる　寒凝也　厳韻

兼三春物　佐保姫　岷江入楚　春は佐保山の神より車おろして佐保山の神とも秋は立田山の神とも云て幻を作て幻を作る神とも云

○貞徳曰佐保姫立田姫とは唐には造化の神とも云秋の花幻を作る神と結ぶ日本にては春の造化の神を佐保姫と云秋の花を立田姫と名づく神祇ゴハ世ニ佐保姫と申名だたる女神

き

祇園の削掛　元朝寅刻ゲツヲ掛のこと云ハ削掛の木と云を撰ん

幸木　幸篭　菓盒子　幸木とハ拂ふ御杖のたぐひ北国にて幸木と云女の腰をうつを云又門松の根を云

鰆　魚月盛ニ出る故　俗鰆の字を用ル

天蓼　去の根　運社ちさ　麦門冬　文字摺草　石蔀　暗足草　藺の花　實鐸草　樊噲草　玉巻芭蕉　玉巻葛　玉巻　下毛　蘆盒子　若菜

ぎしぎしの実　わすれぐさ　蔓いちさ　蛇いちさ　若菜社花

四季非時歳時記新撰草

着衣初　季吟曰衣を着初祝ニ　三月のうち吉日を撰ム

毬打　玉打　ぎりく

万葉　神亀四年正月数王子及諸臣子等集於春日野而作毬之樂　袖中抄　十帝録云黄帝蚩尤の頭を毬打

醒睡笑童集　二月四日の夕毬杖を毬打と云ふ　毬杖ハ馬上ニ武車を乗る子業ニ和漢の事風ふくし　打毬ハ馬上ニ武車を乗る子業ニ和漢

ぶるく　毬打と同物　そ玉ニ縄をつけ地上を運ぶ　毬杖ハ長ク曲ル　花頂山知恩院法主宗總本山ニ四月十八日より廿五日ニ一七日

御慶　年の始の祝詞　物の始の祝ニ

御忌　洛陽東山　忌日ニ京俗所忌法を遊覧の時ハ　十月京福寺の祭ニ忌を終りて参詣ス云

雉子　翠蟲又野鶏云漢の呂后の諱を雉と云ふ　雉を時雉と云ふ　和漢三才圖會　雉雄を

兼三春

余寒　若楓　木下蔭　茶樹の実　櫻の実　うつぎの花　卯の花　桐の花　牛蒡　薔薇　白丁花　要の花　櫻つぐみ

寒の名残　新樹　ほうら柳　卯の花　牛蒡　花柚　要の花　つぐみ

傾きて雙なる角光り頭頭胸腹翼長して光り有り頬眼幻々竈まくして夫目背の翩彩斑色あり脚了長き緣の毛有り尾長くして文彩あり翅短くして蒼黑斑色脛掌翰幻々動し雌は黄赤黑斑して文略く尾短し

[躬恒抄] 白雪の降る日あり

(ゆ)

楪 朴木新葉出るの頃て後に舊葉落つ故に譜集に名つく又親子叶ふ

弓始 甲陽軍鑑 弓始は正月七日に射尾黄幡を忌む之に依て射尾の頭を踏て黄幡の尾を射べし 陰陽暦 黄幡の方吉

湯殿初 雜談抄 和俗歳の始沐浴する湯殿始云

柚祥 柚の

雪解 陽春の氣動いて四年の雪消

蹴行札切 蹴行上人

(め)

雛三春物 印刺 [江戸三百會] 竹串を以て鰕殼魚の目を貫き視解

嵐ぶきの花　青木の花　岩梨　盧橘　常盤木落葉　密樹の花　橙の花　柘榴の花　篠の子　豆植

厚朴花　美絲の花　岩藤　茂り　樹子の花　金樹の花　九年母の花　雲州橘の花　筆

木ちげる　花ちる赤　たかん部

ね曝し　乾く　雛の作る　苔の苗　名ぬ　袋之

(み)

供御藥 茱子。 屠蘇。 元日より二十四日平旦に供之天皇は清殿の東廂に出御あて御歯固の肉膳を供ず 次に一献を供も御酒を嬢の肉菜を入るを屠蘇を飲む 次に二献を供も則白散に車螯を入て三献を供も此度度陸数の菜を入る 次に氷解の酒一盃を飲て終日宮あぐれ 蓬を云 曙覧の歌 正月元日の朝の屠蘇の酒酔ひ覚めて後の心地よしも

白散。 度嶂散。

三物連歌 三物俳諸。 紀事 正月 三物賣。 俳徒あつく庵

を汁にして身一白を煮白よりは赤二白を揚て赤三白を作る 梓に縷め市中を賣歩り 是を作り梓に縷め市中を賣歩り 是を作る 連歌俳諸の三物を名付て云

水祝 四年新 歸を賀

る 眼友を家に集り主人を祝て永禄の祝 河波の三好の臣松永久秀が好を羅て富貴せり

箕面の富 正月七日の東接の箕面

官より梦せらるるあり 山の弁天社に富を突く 祈人きて祈て主伝も

三保祭 十五日 延喜式神名帳 駿河国安原

吉山椒落
蓼
刈葱 招 芋
蕓菜
尚古
生類
郭公
四季の田長
稽島
鷹子や入
宋古多
行く子
原雀
常附子
老鶯

那御穂神社 慶長年中より百度郡に属せり 古来神
輿神鉾神幸あり 湯立あり 大永二年細川孝範の兵
今は神殿 神供神酒の祀のみ 琴弾の祀
雌の間に水を汲へて
滋養を入菜 公事根源 七月 三蓼芹 二月 苗を生じ一本叢生して茎稍々三蓼を附く 水入菜 活の近郊
作を祈り 七曜御暦 八月月次の水 試筆 古書試毫書初
公事根源 金玉を記したるよりの社暦なり 春盤 生菜 真言院御修法
年の初筆を試簡試題皆吟 自八日至十四日 被行之後七日御修法是也 帝王編年記 天和元年始て
の意 生菜を以て相讃送を喜盤と云 真言院を宮中置絃護摩家五穀豊饒の祭なり 年一七

山城湯殿を行ふ 郭公、越る山乃
峯国こそ名の碑 杜鵑の句
杜鵑

歴々の下馬乃
打ふし 保こきく 其角
花の盛の月を
惜しむ 晴れ
歌ゆるさ 恋き人こそ
立ち 捨て
杜鵑 顔の 格子外 蜀魂峠 白魂 杜鵑 山
支考

四季 俳諸歳時記栄草

日を限り修法せらる

叙位 五日

公事根源 天智天皇十四年正月 諸臣に爵位を授けたまふ 叙位の儀あり 是ハ諸臣の年労を奏して位を叙せらるゝ

上元日 花燈の夕。正月十五日を上元と云 七月十五日を中元と云 十月十五日を下元と云

花燈の夕 上元の夜 燈を列し遊観まる 五雑組 天下の上元灯燭の盛なること 市中 山田祭 山田一頭天降り 七頭八常政長宮と云神
職の作る 氏子数 餅を供 事終 山田稽の
特に恵神を切拂 傍 昨日 祭 氏子 家
色 社 祀 疫癘を避る 衣

下萌 月令 是月也、天気下降地気上騰、天地和同草木萌動

狐子祭神事 十六日 伊勢国 津郡

白魚 春 魚

銀魚。 紀国三才図会 俗云白魚江海の交 生也 産乃
鱠残魚。 初 出る人 是を賞 二三月 子を持つ味

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

子 子 蚕 し 虫 かはかむし

水 馬

青 鷺 鷺

鵜 飼 鵜つかひ 鵜川

通 し 時 鳥 郭公

美濃長良川鵜飼之図

おもしろうてやがてかなしき鵜飼かな 芭蕉

命、蓍不合筮、大国主神、天照大神之四月十五日小豆粥を食る之粥を煮る時仆管を釜中に入て五穀及種物の耕作吉凶を卜ひ奉る 雲雀 三才圖會 告天子 褐色鶉似て小し 海上叢草の中に曰く辰黎明に詩に遇天時 蓋則旦飛且鳴直上雲端に至り其後に色一に云叫天子、○如意島に 鹿尾菜 本草 玄南の海中石産の物 生て大葉青の莫名草 鉄線草の如くにして 一千鱈 和漢三才圖會 乾鱈魚は色白きものを上とす黄を帯るものを次とす世俗に用力を好むもの常に嗜む云 蠟 或説に ひこばへ 或説に ひこばへ 木の切株の細き芽を生ずるを蠟と云 新古今 根深好忠の歌に 今日の去年の古根の子蓬 今日の去年の草木も蠟の名目あり 蠟の草木の草木の草木

部類 俳諧歳時記新撰草

冷し汁　煮冷し
なまこ腸　蟹の干し
干鱈　干鱈
干烏賊　塩烏賊
鮒　風爐の茶

神釈

筑紫祭　鍋まつり

君が代は千歳も経ぬ稲荷人

舊正月　太簇律

立春節　雨水中

睦月、王春月、孟春、夏正、上春、大郎月、初空月、雲初月、早緑月、年始月、書新月、以上異名

一月　小寒節　大寒中

政暦、記載略　四方拜　一日　元始祭　三日

政始　四日、新年宴會、五日、陸軍始　八日、

孝明天皇祭　三十日、

二月

い

虎杖　蘓頌圖經　虎杖三月生苗莖如竹笋狀上有赤斑點

初生分枝子葉似小杏葉七月開花九月結実○時珍曰杖其莖云虎其班云　陽物異集　三月ごろ芽を出す

八重咲　赤ども咲き　ま福かく咲き

挿杖　なるつ花一種二名ニ子ニ爾為ニ記きさ

なほ長く云い既に長し

神杖　ふつ

糸桜　大和本草　桜は彼岸桜と同一枝長く糸の

貴船神社

虎杖　ふつ

住吉卯祭　稲荷祭

大神祭　八幡祭

山科祭　多賀祭

堅田祭　平野祭

當麻祭　杜本祭

梅宮祭　松尾祭

當宗祭　大津祭

手安天神詣　山寿日使

龍田祭　久世祭

萱宮祭　御影祭

四季俳諧歳時記新撰草

彼岸桜　花桜

銀杏花　酸陽修詩　二月開花成

簇白青色二更開花隨即落人罕見之

は

初午　二月上の午日ニ　神社故実　山城国紀伊郡稲荷山稲荷神社者ハ官幣大社ニ祭神ハ大山祇倉稲魂神ニ寄洲府志書社の出現は和銅四年二月九日なり世説に従い長暦を以て元を推ると紀は其日偶初午日なる毎年二月初午日諸人群参も本邦衣食の祖神として蒼生安逸の神社ニ門前家ニ百穀の種を変又ハ物の伏見人形の者多く有り特産焼と云い特産の品清水焼ハ神ハ元来作り人神前に投ぜる鈴ハ多く薫の香を食とし延寿を祈る

初雷　初電　月令　仲春月雷乃発聲　始電

蜂　同巣

蜂名　蜜蜂　土蜂　大黄蜂　竹蜂　赤翅蜂　蟷螂蜂　蜜蜂は夏月暑の中々

蜂く已が巣の食物とせんが為に蜂を蜜を造り蜂を山蜜と云又大樹の洞中蜂人を求蜜と云家に蜂を家蜜と云元蜜を蜂蜜と云

蜂の巣の日　かな成のあれ

山王祭　葵祭

神祭　中山祭　向日明神祭　山嵩祭　堂義祭　神衣祭　戒檀堂冠帳　夏入　佛生會　浴仏　花卿堂

近江八幡祭　水至能　清五地主祭　練供粮　古塔祭　花摘　灌佛　龍華會　佛の產湯　茶供

鹿　牽の性淫ニ、牡牽数の牝を交る牝孕み九月にして産む

孕雀　雀の性淫ニ、三月秋八九月孕て卵をなす巣を作て卵を伏せ雄雌の爵陳雀社の破竅行木のうつろ木の間に産む

初花　初櫻。花を摘み陰に陰山に生る初櫻は奥山より咲て奥山より初櫻は奥山に生る也陰と陽と相対して遠近の差別

花待　初花を待式　花咲ものを待ていうつろけもとをなき事ふるへて数を繰を待て待まい思い

二月堂行　南都東大寺にて一月十四日より行法

紀事　牛王加持の行法は毎年二月堂の本尊観音の像大山二体あり上古より太像観音の前に於て法事を修す八月より山像の法事あり十四日に

同水取。

灌佛　花卿堂之圖

灌佛の法の見あり　身延山士朗

大切に持る　唯貴

弱錦子も　佛の產湯那

夢太　灌仏もまた

ふるまを家にうつるまを

竿のつゝ　の種は實生

郎　右白

竿ツヽシ　俗ニ八日花ト云

千鳥子　日光祭

和哥祭　花供

四季詳考記　卷之二　夏部

蒜　八月稗に素苗を植る麦蓋を食ふ秋種を取む

接　水屋の井に初に牛王を貼る物の水を汲む

骨木花　和漢三才圖會　接骨木人家の庭蘭に是を植る三四月小白花を開く撰生して子を成

蜷　蜆蠃一名螺螺師小泉多子きい多小溪に生ず形

韭　韭青く翠の根を以て多つべくなり

蛾子取　和漢三才圖會　南部津輕蛾夷島にて九十月より夷人是を取る大なる物

河貝子　美用蛾字非也

四月神歌　公事數年五月乾坤　二月　ひはと　三十

安居結夏　友往　夏鶯
夏行夏花　友書一夏

公事故事

青簾扇拝

○五月ゑ部

乾坤

皐月　端午　藥の日　幟　鍔　菖蒲太刀　神水　神酒製　印地　竹酔日

ほ

本妙寺詣　初午日　初めて上山の辺　お旧跡あるを今も

二月初午詣あり此本妙寺山門に萬して天台宗に織田家の兵火にかかる山門一旦亡び江戸の末寺も共に回録もまた又主一寺あるべし相傳に道灌が那須那古足山本願寺の四行こと上の山中に所の本尊馬頭観音と甲俗云伝慶秀郷が守護本尊なり毎年二月初午日開帳所の法

こ

東福寺戴法　初午日

寒日山東福寺は法の宗南に所の森永二月方寸の紙に方の寒を書て寺内の同聚庵より出す是疫病を除く

ゑ

云初午の日方丈に所の丈に明兆が画く

延の観音三十三幅の像を掲け戴法修

祈年祭　トシゴヒノマツリ

四月神祇官に於て祭る天武四年二月より始る周礼祈年に求豊年也神祇式祈年祭神三千一百三十二座之内神祇官祭神七百三十七座宮内卿上国司祭神十五座

道明寺祭　ミチアケデラ　マツリ

北五百河内国志紀郡土師村に所の一名土師寺中興の住持の尼覚寿を開基の伝あり故に公が左遷の後ものの寺に書写の経を納の社合せて如三十五日を祭る

餝兜之圖

疱瘡の時八幡宮の幟を立て家の内に置く

○

粽中に入る粽は端午の日に用ひ菖蒲を用ひ

君子代の御時中幟に水傳山地竹の太刀風を立て端午の節句に用ひ兜を飾る

虎が渡雨　徽雨

入梅　梅雨

さつき雨

鳥巣　古巣。五雑組　羽族之巧過於人其爲巣只以一口銜凡而結束牢固甚於人工大風拔木而巣終不傾也雜木枯枝縱横重疊不知得膠固無恙此理之不可曉者

或は赤子　新撰字鏡　和名加波比良古　荘子齊物論　昔荘周夢て胡蝶と成る胡々然として自楽し志適へり周

巣　ス

蝶　ちょう　蝶蝶、黄蝶、蝶々、胡蝶、蝶の夢、風車、胡蝶の夢。招物論　一種大きく赤斑のあり

蝶の称方言

蝶　ちょう　蝶蝶、黄蝶、蝶々、胡蝶、蝶の夢、風車、胡蝶の夢。招物論　一種大きく赤斑のあり

蝶の称方言

釋奠　シャクテン　上丁日　公事根元　是は年に二度の二月と八月と有若し日時国忌祈年祭

元年二月丁巳始て釋奠を行ふ　続日本紀　文武天皇大宝

礼記王制　菜を歃

五月晴　さつき晴
舶風　ばふう
半夏生　はんげしやう
芒種　ぼうしゅ

植物類

菖蒲　しやうぶ
蓬　よもぎ
あやめ引　あやめひき　根
佩　ほう
六日菖蒲　むいかしやうぶ
菖蒲湯　しやうぶゆ
紫陽　しよう
競馬　くらべうま
藥草刈　くすりかり
草合　くさあはせ
百草　ひやくそう
菖蒲　しやうぶ

祭を奠て先師を礼す　[くすり]　大学饗　[くすり]　を行ふ孔子及び十哲の影を祀る上卿は少納言文章博士、孝経、礼記、毛詩、尚書、論語、周易、左傳、年四月上巳日、山城国を訓郡とし賀茂の二神を[公事根源]此神は皇后の祭なれば本社遠きを以て祭とす

大原野　おほはらの

祭　まつり

上巳日、山城国を訓郡とし賀茂の二神を[公事根源]此神は皇后の祭なれば本社遠きを以て祭とす

踊念佛　をどりねんぶつ

毎年彼岸中日に持ち来る四天王寺の聖徳太子の御筆の北八菩薩の画像を掲げ念佛修行あり今日は大念佛なり

萩の焼原　はぎのやけはら

野焼　のやき　焼る行の萩原を云○萩の若芽萩の初生芽等のめく生し

朧月　おぼろづき

朧夜　一説に霧の夜　[霧夜]

蕨　わらび

早蕨、鎌蕨、初蕨、蕨手、

本朝食鑑　蕨の初生芽を生にて菜とす○時珍曰二三月芽を生じて菜とす曲として炊ちみ兒の拳の如しと

[朗詠]　紫塵嬾蕨人拳手○仙人の拳も持ちたり蕨

う那　て由　○李云此部後の白塵と嬾との二字は塵と嬾との誤なり下学集に辨しかつさも宜きと

[坂川百首]　芽の萌えうちもとめ

若紫　わかむらさき

[本草]　蘓恭曰紫草は葉香

春日祭　かすがまつり

上申日。大和国添上郡春日良の宮殿大社二殿の神は武甕槌神経津主命天児屋命天照大神[公事根源]大中納言のうち藤原を上卿とす前夜京を出て南都に廻る

貝寄　かひよせ

[雜談抄]　天王寺法花記に拙は生れて二月若菜摘の後難波の潮干に貝を寄風を云

鬘草　かつらぐさ

本名玉蔕花九月に生して三月に枯る三四すぎて恰も麦の苗の如し女児是を持て鬘結ぶ故に鬘草の名あり

貝鳥　かほとり

よ鳥

花かつみ　吉蒲刈
田植　まとめ　早苗
若苗　田植歌
菱の実　川骨
藻の花　藻を刈
浮の花　浮草の花
花菖蒲　花かやめ
義菖蒲　紅の花
まつも花　鉄線花
志美の花　ぎくん美の花
紫陽花　あつさゐ　四季の花
百合花　さゆり　張る合

吉野桜 桜中り

鬼百合 光り草

雪の下の花

朝霧草

茅石蚕

くわつり草

蛇床子

夏菊

竹葉

石竹

翟麦

川芎 移子 蛇移子

書一友

神明色鮮

十樂

天南星

乃昌

かくばく草

大和移子 唐移子

十わも草

面天花

梔子花

蔓の花 かのこゆり

八重南枝 良きも書日山さしあり昨悪きものとこうり夜蚤なども悪きもとこうまれく去バあく表島と未決之 ○ 此まる良るかほよ島一勝くく何のもも定

帰鳳 今いの尾。月令 孟春月、鴻雁丁の別も。 淮南子 燕春分

蛙 無声の蛙 長明無名抄 井手の蛙とやうとこさ

吉野の餅 吉水院考物 二月會式とは正頭くく者五月ろ未五月と長日不退の行人寺僧方を花供と

配 ○ 吉野の餅 ○ 新能 芝能。紀事

金銀花

未央柳

榊の花

合歓の花

栗の花

柘榴の花

樗の花 雲見草

梅檀の花

生姜桃

椋の実

杏子

小梅

青梅

楊梅

李

枇杷

青袖

瓜の花

瓜

四季排階職時記新撰草

五月植物七部

二月より九月

三十三

胡瓜　茄子
粟　蒔きび　蕎
胡麻　蕎　稗
蕃豆　引　蔬豆　引
莧　すべり莧
あらぎ　早松菜
若竹　今年竹
竹植日　竹の子刈

生類

蟬　ちゝせゝ
蟬音を入　蟬の抜殻
蟬の抜殻　水鶏

月令 仲春之月鷹化爲鳩 本朝食鑑 俗ニ藤菜ト稱シ或ハ鼓菜ト稱ス 雜俎 タンポヽの名 田螺 和漢三才圖會 和名太田比、俗ニ太仁之 種浸 種井。種おろし。種蒔。 紀事 二月上巳の中吉日を撰ひて農民田穀の種を水田に浸す 彼岸の後十日に取出す 大根社花 妻の葉高く蕾を抽て小花咲く紫碧色なり 田雅翼 野人今歲山を焼くときは来歲豆菜繁生す 公車根源 太政官に六位以下の藝能あるものをめされ器量容儀を試る 和名抄 和名以多知久佐、一名以多知波世 烟野山焼 公車根源 太政官に六位以下の藝能あるものをめされ器量容儀を試る 和名抄 和名以多知久佐、一名以多知波世 烟野山焼 公車根源 太政官に六位以下の藝能あるものをめされ器量容儀を試る 和名抄 和名以多知久佐、一名以多知波世 烟野山焼 公車根源 太政官に六位以下の藝能あるものをめされ器量容儀を試る 和名抄 和名以多知久佐、一名以多知波世

植

花

木

草

衣食類

粽　菰ちまき　かざり粽
柏餅　芦ちまき　茅ちまき　紀

鳥

鷹の子　かゝの子
鷹の子毛替る　羽ぬけ鳥
鷹　鷲　羽抜鳥
鹿の子　獣　狩
鯢　狩　照　射
火串　きつを
小鰺　蛆
蠻　虫　蛇衣を脱
蟻　蛭　生

園韓両神祭

雍州府志 云 舊宮内省ニ

蒲公英

本朝食鑑 俗ニ藤菜ト稱シ或ハ鼓菜ト稱ス

種浸

種井。種おろし。種蒔。

田螺

烟野山焼

雅翼 野人今歲山を焼くときは来歲豆菜繁生す

列見

公車根源 太政官に六位以下の藝能あるものをめされ器量容儀を試る

蓮翹

和名抄 和名以多知久佐、一

葛の若葉

大和本草 地葛ハ衣の後ニつけ

梭木

梭 織。 月令廣義 梨を接くに妻分の前十日を用べし

燕

同巣。 和漢三才圖會 燕ハ玄鳥白頸赤美の領ニ妻来り秋去る鳳凰と表裡ちゝ飛翔ちゝ甚捷く直に翻り仰向ひ飛ぶ他鳥のごとく

槃會

涅槃像。二月の別。 摩訶經 涅槃乃清淨不死不生之地、一切修行者所依帰注 超脱輪廻出離生死之地を云 死をしつてあるべし 如来滅七十九、二

涅

菖蒲酒　菖蒲帷子　菖蒲帷子　菖蒲ゆかた　菖蒲ゆかた　菖蒲ゆかた　菖蒲ゆかた　菖蒲ゆかた

菖蒲ゆかた　菖蒲ゆかた　菖蒲ゆかた

今宮祭　両社祭
有ふしの日　住吉卯田植
山田卯田扇　大原さし
石橋山詣　富士垢離

公事故実

騎射　菖蒲薬
菖蒲の礼　五月の日
左近の馬　同
右近の馬　同
艾虎　艾人
菓玉　五月鏡

長命縷　懸命縷

菓玉之図

菓玉や衣紋の女達　中琴

菓の美　菓の匂ひ物
桃印符　赤霊符
競　渡　兎　粉
石原の祭
滴粉園　水園　白園

四季雅楽歌詩記新撰集

五月

む　蒸鰈

和漢三才図会　大さ尺ばかりの鰈の子三月細白蒸さく

う　五加木

藤頌圖經　五加木　苗を生じ莖葉ともに青く叢おい春月賞之

姥櫻

羅山拾稿　とのゝ茶業にして枝上多きゆゑ老婆多く歯落てゆゑ歯と業とゝ

の　茖葱

藤頌圖經　山原野地に多し　野人喰ふ

こ　枸杞

藤頌圖經　春苗を生じ葉は柘榴の如くして軟く白き実を結ぶ

和訓栞　和訓栞に曰ク　茗を浸漬して飲ム

寒要　春茗を弱茗又芽茶ともいふ

熊谷桜

大和本草　ゑさ尺八寸過ぎして花さく長

和漢三才図会　細白蒸さく

もの和を塩水を以て蒸し煮熟せしめ取出して陰乾に干ゝして炙て喰ふ炙くむ蝶と名づく

法の書に正月の部に若艸、新艸を出せり又二月の部に茗の若芽の事猶長しとあり心ゆ　源武

茗の若芽　草芳。資文。曰　俗語活

五月公故事六月乾坤　二月やまふと

三十六

て四五尺に過ぎず彼岸桜にさきそめて八重の花さく桜の先登なり花色白くして小紅を帯たるも桜もまた原平の戦ひに熊谷直実桜の一の谷の先登して名を顕はせり今家物語に記せり此種余種の桜に異なる以て熊谷さくらと云

や　山桜

一重桜の一種山桜

薮蕎麦

大和本草　林中に多く生ず葉は苧麻の葉に似たり歯刻のごとく並ハ四ツ茎紅色節毎に葉三ツつきて節毎葉の上に一處に十餘花のつきて開く花の色淡紫

ま　摩耶参

佛母摩耶山切利天上寺は摂州兎原郡畑原村の山上にあり大化元年の創始なり二月初巳の日飼馬の無難を祈るなり馬を引て参詣して広郡昆布を買て帰る

松毫島

千載ひくしを　李時の島

菊載の影の小さきして毫須易く養蚕中に育ひ成りて三河遠州に多く並木の松

五月公故事六月乾坤　二月やまふと

三十七

○六月之部

乾坤

氷室　ひむろの雪　お室ゆき
大暑　小暑
炎天　極暑
日盛　三伏
温風　風薫
去くるる山　泉
せんすい　清水
ひめす　ひのむもの
つきの日　ありき
ひむろ　ひむろ
ひむろ　ひむろ
ひむろ　ひむろ

牛	牛馬	牛馬
牛蒡	牛蒡	牛蒡
霍	亂	霍乱
夏ぶし	鵜つく	夏引の糸
秋	待	秋隣
秋近し	夏ふる紀	夏ふる紀
夏より後	夏蕨	夏蕨
夏の限	夏の別	夏の別
夏ごろ		
植物類		
沙羅の花	沙羅の梅	沙羅の花
蓮		

かくれと文芦の角（アシノツノ）　ねぶしの雛。支考曰ねぶしのさえ角組む芦。いづるい牛の角の巡

組いめぐむ芦の角　今三角ねぶや　菊もまする初日芦の角に角くむ　かとの蛍

昼そふく通光

さ

西行忌（サイギヤウキ）　西行法師は左金吾藤原の康清の次男俗名は佐藤兵衛尉義清、鳥羽院の上北面徳大寺家の殿管領なり号馬哥道乃人なり保延三年薙髪して大実坊円位と号す　隠逸傳

西行曰、和哥は禅定の修行なり吾死ぬる時は仏法を捨て哥を捨て死ぬるを願ひ願はくは月の満ちて花の下に死ぬるを願ひ願はくは花のもとにて死ぬるを願ひ願はくは蓮の開くを願ひ願はくは蓮の開くを願ひ願はくは蓮の開く

白蓮　紅蓮　水芙蓉

荷　蓮の巻葉　うき葉

蓮の実　澤瀉

蓮の花　夕顔

風葉　時計草

射干　ひのうぎ

日向葵　日車　日向

玉簪草　鶯卵

眼　皮　葎の花

澤瀉　約蘭

稚の尾　猪牙花

宮司の一老と巫女文子と直垂を取て神前に供す　是を供物の上に菜花を挿む故に老巫女或ハ菜花つまる時ハ稲束を挿む　季御

讀經　江次第頭書　春秋二季百僧を南殿に請し大般若經を讀しむ　納言奏

各一名南殿に着て事を行ふ　自餘の中殿不候也　貞觀の例毎季ごとを行ふ　元慶の天皇践祚之後二季修之云々

宿根より生るもの之又稚子い立春に下も二月に芽を出も二候を經て葉始分出

蟄の節　時に芽を出も二候を經て葉始分出

遺教經會　訓讀會ともいふ。瑞應山　自九日至十五日　大報恩寺釈迦堂ハ京都上立賣朱雀の西ス　元天台宗之近世真言宗ニなる　千本の釈迦堂是ニ　紀事　此寺に菅原秀衡建立ニなる堂并ニ年毎の細手習せしと云　察ルに多く廢頽も毎年此節書ル　風烈しく菊に奉ル

紙すき草

麒麟草

赤草　青兎灯

青ねぶり　薫荻仁

絡の花　紫蘋

蒜の花　茗荷の花

麻　ちぢら麻

菱　苅　藍　苅

つくね　青田

田芋　取　小豆豆

まさきげ　十八さきげ　糸瓜の花

瓜　吉来瓜

故に志ろしめす釈迦尊念仏の法ハ末代の衆生を定覚上人ハ十万の音乱名号大念仏と云一旦中絶して三百五十年の後徒然草に人ハ遺教を訓讀せる遺教を訓讀

積院の僧徒是をつとめ　仏弟子の法を遵戒しめ遺教經

元海年涅槃を入滅ハ世尊の教ハ世尊の教

きさしもあり世俗云雪の果涅槃忌

雪乃果

(み)

未

開紅　一種の稲ニ赤紅ニして八重咲ニ花大ニまさるざる時ハ白ニ赤ニ咲ニ洛陽の

誓願寺ニ稲ニ赤紅ニ咲ニ元年の

水間祭　上午日

泉州府志　水間寺縁起ニ云竜谷山水間寺ハ聖武帝の勅願ニ依て行基僧正天平年中ニ開闢する処なり本尊

正觀音行基作ニ二月初午日を會日ス　水口祭　苗代之余出ル　水取　二月重行之

(し)

常樂會　拾芥抄　二月十五日南都興福寺常樂會今日東金堂ニ圓

浮屠金の釈迦像の涅槃像ハ

傳云金匙ニ重く及ル今日此涅槃ニ

積塔　紀事　二月十五日

がんでん瓜	茱萸	青瓜					
姫瓜	葛の花						
凌霄	百日紅						
早桃							
李	桃	林檎					
木耳取	竹の皮取						
生類							
初り雲雀	雲雀	鶯					
鶯初鳴	鶯鳴	巣を					
空蟬	せみのから						
蜉の法声	生死	虫					
生て入る式し	身をこがす虫	蛍					

育人撿校以下、京高倉殿小話清象庵ニ集會ス光孝天皇の皇子二夜の御子の為ニ積塔會を修せ玉く相傳ふ兩夜の皇子育いまつり給ふ故ニ皇育を愍たまふ明日皇子の忌日あやまちにより皇育ん經を誦し羅尼を唱て宮忌を修す

聖霊會 摂州東生郡四天王寺、聖霊会と号ス聖徳太子の

時宗盥念仏 二月廿三日

社日 尚書社日、土地

彼岸。五条の西市新屋ニて毫を修せ一遍上人寿二世應所の作弥陀来迎

妻神也 月令 二月 節撰元日命民社郊社曰社稷を祭る妻分の事後ニ近き戊の日を云ハ吉也

社翁雨 提要録 社公社母旧水を食す故ニ社日酒をのめば耳聾を治す

治聾酒 石林詩話 世ニ云社日酒をのめば耳聾を治す

鹿角落 月令 仲夏鹿角解 衝波傳 鹿生ル三年ニして角自ら墮

彼岸 時正。彼岸四徳成就經 疾く仏道を成せハ書ニ初るべし二八月七日晝夜同

金亀子 毛虫 蝶 蟷 自取 蜻 川狩 持網 四手網 蠶

衣食類

氷	餅							
夏酒	甘酒							
出きけ	麻地	酒						
夏切茶	水の粉							
苣の古挽飯	菖	瓦						
砂糖	瓦	振商	水					

時ニ於て一切の諸佛三世の諸菩薩及び無数万億菩薩說法して成生し給て樂を受 金剛疏 生死ハ此岸なり涅槃ハ彼岸なり煩悩ハ中流なり生死の此岸なり煩悩の中流を渡り涅槃の彼岸ニ到る云々 玄門和尚筆記 ○時正ハ彼岸の中日を云中日ハ年中の昼夜ハ長短なく同しき故時の正きを云

比良八講 紀事 江州比良大明神社、古へ今日比叡山の元徳法花八講を修す

今ハ至て比良八講と称し此日湖上ニ引鶴 引鴨。

老蘇故十日、引ハ帰る也鶴鴨の類冬より春すでなく風烈も故ニ船急事ニて出さず

一重櫻 桜ハ花分の古花咲く彼岸桜より至十日ハ盛り是ハ又八重櫻ニ先だつ故ニ桜ハ一重を以て本とす桜ハ一重のみなり

彼岸桜

小白軍葉喜分の後彼岸ニ咲く余の花ニ先ち川名小桜

餅花煎 十五日

京畿の俗正月用る処の餅花を炙へ煎て二月祭礼に供物とす又霰のごく餅を煮て涅槃の供物之

人太切麥
冶麦干凡
奈良漬薑梅
梅干漬納豆仕込
[illegible]造り
中鮒
[illegible]

神釈

冨士詣愛宕祭
六月會祇園會
長刀鉾 函谷鉾
葉[illegible]鉾 放下鉾

[illegible]
[illegible]
[illegible]

船鉾	孟宗山	郭巨山
琴破山	白乗天山	播磨山
太子山		
末城前山	山伏山	保昌山
芦刈山		
天神山	。以上七日	
稚子茅山	洋妙山	鯉山
黒主山		
鈴鹿山	観音山	鶴山
行者山		
船鉾	。以上十四日	
洋孟祭	芦の御輩	
熱田祭	東京 山王祭	
伊勢祭礼	竹生島祭	
博多祭	妙音講	
相國寺戒法	座頭涼	

後稲荷の神出現す志賀寺長者の家に寓年月を経て終に稲荷山に寺今の旅所は芝寺の宅地に垂迹の時神輩こゝに坐す二十日是吉の選風に此神二の辛の日卯出二の卯日還幸故世俗諺に云ふ卯出うかくと卯還出

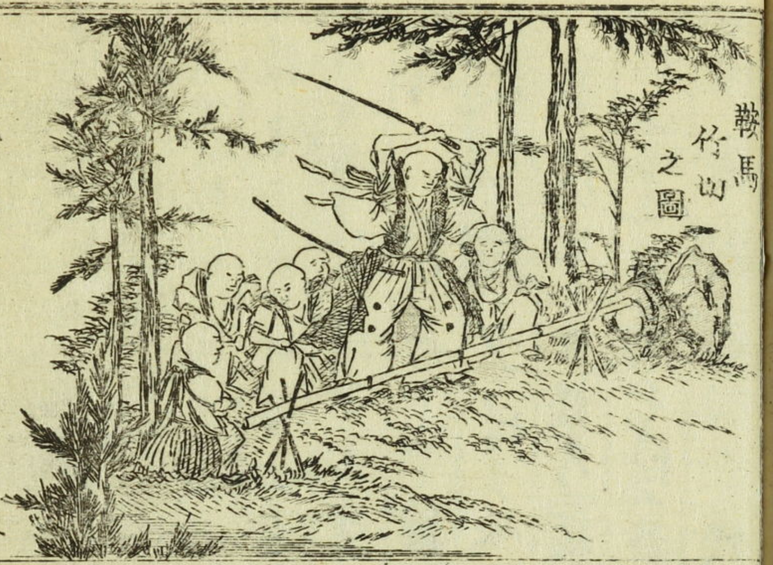
伊勢樣（イセサマ） 此花能稱の種と云て花遅く咲

家樣（イヘサマ） 季吟曰人の家に笑樣に

犬櫻（イヌサクラ） 小白花にして又花に丸く稱の属にして淋しき故に犬櫻と云然て似て非なるものゆえ犬の字を付く いとゝ物さびしく犬蓼犬蕨豆犬柘又一番鎗二番鎗と云ふ 武家に犬諸と云ふ或は犬筋鉄集の影図 似て非なるもの

は

花（ハナ） 横川日橘の我国に於ては桜を花と云ふ○芭蕉翁曰我家の正花論に花は稱に花の稱の稱は立春に五十五日を数へて又年の内に遅速ありと雖も大凡遅速は遠国も古都山の町に咲て上方は六十日より おそし ● 花曇 陸放翁天彭牡丹記 半晴半陰謂之花曇養花天同之 ● 花錦 古今序 さくらの所々たゝしく乃人丸が目には見えず 人丸集 白雲の山の稱は人



竹伐や松の竹伐しの　麦走
外きりや若竹迄の　湘白

四季非常識特記所禁単

色の手持に見えつるもの如きもの稱あり○花の雪、花の雪の稱は又雪の花の稱あり○花の雪の稱は又雪の花の稱あり○花の雪の稱は又雪の花の稱あり

咲初 咲の稱あり

今或 咲つゞき叢あるを稱す又雪の花の稱あり

あらん ● 花の波 [所今] 正花の水辺に白の波の如きは正花に似たるを立但し波に花を付る白浪の花に似たるを立但し波に花を付る

さ四の白俳句に白浪を詠て花と云是なり ● 花の鈴、護花鈴、花の鈴を付て花を返て花と云是なり ● 花笑ふ 又花の笑咲なとの字を訓て花の字を訓

● 花の顔、花の容、花の姿、花の肌、花の遊、花の美色を麗美して花に美人の艶色に美人を花の艶色に美人の上すもいひて花の王、花の主、花の主、花守、花人倫に花をなぞ花

花の数、花の表、花の裏、花の花、[天水抄] 花の花

勅一る竹伐　上巳　波祭
座広祭　厳島祭
愛宕千日詣　天満宮祭
橋立祭　幸崎祭
西宮陸詣　西宮自然
住吉踊　住吉火焼
住吉おどり　結上祭
両　乞　大　祭
夏　たなばた　夕はまへ
たなばた笠　名越乃祭
ねぶた祭　ねぶた祭
西祭　川　形　代

る体は山里陸山人と絶て見る縁なく花
なるにして休しき体なり、ちるとしていい知ぐとこ
数い巻中寺彫ぐ又しいる詩の庭花数
ぎるめきたる体を感ぎまるまた花をしていぐ
ぐ　花鎮祭　公事根源　是は大神狭井の二柱
ぐ　神祇令　三十日

馬蘭　種類図経　葉薤に似て長く厚し三月紫紫花を出て五月実を結ぶ角子を
はし庭の如く大して赤色襯ぐ
根細く通ず黄色一人取て刷ぐ　如子草
荒蕪本草　山茶
三月小黄赤色　令法　救荒本草　山茶
五尺枝梗に白色襯ぐ四
摺ぐ生ぐ長ぐ稠く密なり　瓶葉を並べ乾し
茶ぐ飲料とす　八十八夜　立春の日より八十
八夜に当る　春
の淡　妻の沙ぐ旬ぐ心ぐ行妻の
ぐ沙ぐ旬ぐ妻に沙ぐ行妻の

(ほ)　木瓜花　和漢三才図会　世に木瓜
ぐ沙ぐ木草の

蓑の輪　輪越の祓
ぐ沙ぐ　庭の祭流
小豆ぐ　神　夏神楽

公事故実

醴　俗ぐ　忌日御飯
神令食　西体西卜
鮮赤西粥　節　折
雷鳴の陣　施　米

○七月之部

乾坤

ぐ沙の秋　ぐ沙の秋
初　秋　早　秋
残　暑　秋の初風

註ぐ沙ぐ是本桃ぐして木瓜ぐ沙ぐ近頃唐木瓜
出ぐ沙ぐのぐ人ぐ沙ぐ巻を書ぐ乃ぐ沙ぐの木瓜ぐ
唐の木花冥ぐ
保紅色ぐ

郭公の巣　和漢三才図会　杜鵑ハ巣を営むぐ
ぐ沙ぐ巣の古巣を窺て是を借
ホトトギス
説文　杜鵑蜀主望帝所化也
て卵を生ぐ
至今寄巣生子　百鳥為哺其雛尚如君臣

(こ)

桃花の節　月令広義　唐徳宗以上巳
落今言桃花節　執之乎

鶏合

閑鶏を周の世に始て起ぐ沙ぐ
閑鶏の世ぐ沙ぐ
市ぐ沙ぐ
閑鶏ぐ沙ぐ
聚ぐ沙ぐ
紀事　禁裡清涼殿南階の花ぐ
列子　左傳　車文類

喜蘭花　花彙　山中に多く
ぐ沙ぐ一根叢生す
ホ　クリノハナ

土佐海硯石取　雑談抄　毛吹草に三月三日
土佐国西寺のぐぐきのはた

初嵐　ゆさゝむ
ひやゝか　律の志ゝん
新涼　初て すゝし
稲妻　初月
花火　七日節句
七夕　たなばた
織女　牽牛
星合　二星
天の川　銀河 金河
彦星　星の子 向星の契
星祭　たなばつめ 姫 たなばた姫
糸織姫　彦ほし姫 棚の蜜姫
薫姫　百子姫

より硯石を取出もて侍るに彼年の時刻に又く西寺の僧侶上に刻を經を誦まるゝ伝る云ゝ

領主の采地にありて禰に石を取て今世も禰に取あり

鳶の巣 鳶の巣 鳶は樹上に

なる木の枝を以て組合せ巣をつくる

虎尾櫻 此櫻の影必も枝條屈曲して花の莖ゝゝ長く枝上に花ゝ繁を殊ゝゝ虎尾のゆく故に称の尾と云

ち

重三 五月五日を重五九月九日重九と云 三月三日も是に同しく重三と云

長春 月季花也

處ゝ人家に多く栽る薔薇の類形ち青き莖有き夢硬き刺あり深紅子葉月を逐ひて咲故に実を結ぶ

丁子草 大和本草 葉は柳に似て中の堅筋あり白く花も丁子に似て

茶搗 類頃圖經 茶は喜中、始て嫩葉を生ず蒸焙て苦き味を去る也

茶 本朝食鑑 凡茶を採の候は八十八夜を過て を摘て鍋炒 十八夜の後を過ては字治の茶葉馬場氏曰始て茶を摘を始る日明治三年三月五日

り

鏤人 唐の時三月に雛人を飾ると云有

七夕鞠

初秋や　たなばたつめの　姫座の衣着　丈

文月や一人ぬき　女の子　丈

ほしき女の子　嵐雪

ほしの夜まや　天の川　乙由

彩の稽や　嵐を　明かるく

あつまつを　杉風

初つ歯や　秋の風

星合や　歌を詠して　山陣

殿座に入る

四季

雛人は我邦にて雛人形の類なり

林檎花 宋馬志閑本草 林檎 樹柰に似て三月

紅色を注ぎ子も柰の如し法

を

御身拭 山城淀藩法寺の本尊釈迦

佛五尺貳分の立像にて天竺毘首羯磨作る所にて今日冥加有寺僧白巾を以て佛像を拭ひ拂ふ拭と云 三月十九日

わ

若蔣 本草綱目 菰 池沢の中に

是菰筍 芰白菰菜也是を若蔣と云

忘霜 此時

農民種を撒の節と也 凡立春より八十八夜のところ必霜あり 落木の花房嫩葉こゝに有時多く

枯る故に此後 蕓を掩ひ此霜を防く字治茶園のやきハ法にて是を畏る別霜も霜の別と云

か

寒食 荆楚歳時記 去冬至一百五日、有疾風甚雨、謂之寒食 周礼 垣氏

仲春禁火干國中 季春將出火 家禄 介子綏五月五日を以て死 文公ある哀民を以て挙ざるも

今の人多至り一百五日を寒食と年中 五雜組 鄴中記 并州介子推が焼火を数

天の川 乞巧 織女 星合 士朗
梶の葉 さゝぐ 仕立 ゆかや 女文字 九董
星の妻 浮世の鐘 ゆめ 星の妻 若翠
ゆめ 覚ぬ ほけ たり 撫の音 月百
立琴 末て 松風 ゆめ 遊流
別れ 星 星 星 ハ 妻 の 奥 中勢
文月 や 乞 妻 なる 影 端 立 蓬山
秋 たつ や 待 ゆ る 釜 の 巻 白時
相 の 末 て 声 ゆ ゆ の 秋 ゆ ゆ
初秋 や ゆ 戸 明 て も 也 て 工 風 彩左
糸 に の つ ひ て な る 日 す ひ 和 明 ひ 俄 年
琴 も 笑 む や ま ま 笑 ゆ 女 七 夕 文海
ま ま 秋 や ま て ま ゆ ま ま 星 の 妻 可依

秋さる姫 秋さる日 衣
とゝもしつ 海

男たるゝ 女七夕
頸ひの糸

七日漢書の周華の傳に太原介子推が髮を焼を以て母を養ひ中一月食を絶て魏武帝の時太原上黨を至の後百有五日遂て普天皆寒食を絶て訛を以訛を伝へ唐の時に至て遂て民間禁令を狂せ之をなりて鶏羽を以排て庭中に入る焦るものハ輒死を論ず是何等の刑法ぞや国紀を禁ずるとも其見卓一矣

● 杏の粥 玉燭宝典 寒食に大麦粥をつくり杏仁を研きて酪とし湯を以て是に沃く ● 麦の粥 事文類聚 寒食に麺を以て蒸餅様をつくり麦をまろめまゝに付て麦鱗と云粥つくらく麦の粥八東鑑の誤り歟 書云 活陽に人家に食に萬花輿を粧ひ楊花粥を

● 楊花粥 玉燭宝典 居人寒食に遇へハ楊柳の条を折て飯を煮るに青くして光りあり是を食へハ陽気を資く道家まゝを青精飯青飯と云 ● 槐花粥 金門歳節 寒食に麦花輿を粧ひ槐花粥を煮る云

樣桜 カバサクラ

大和本草 かば桜ハ桜ハ桜之古今こゝに桜と云ハ是也

海棠 カイドウ

唐楊貴妃傳 明皇嘗て太真妃を召す妃酒を被て新に起く帝曰此乃ち海棠の睡未足耳、後も是花の名

つ海ち 海ち海む 海 海の花

柿の蔕 カキ タイ

雑談抄 俗に柿の蔕を焼て疳虫を除く 季吟 桜山抄 三

天の名 七夕 の名

産の立琴

硯洗ひ

机 硯

七夕鞠

中元 十五日

生身魂

盆のつと入

踊

扇置

団扇捨

二百十日

相撲

龍田姫

露

雑の付 雑の付 雑の付

産の立琴

机 硯

中元 十五日

盆のつと入

扇置

二百十日

辻角力

露

妻の玉 袖の露

妻の海 きりの妻

川 妻 きりの雨

四季 非常成時記新撰 雨

妻の玉 袖の露

妻の海 きりの妻

川 妻 きりの雨

月を出す 月を出す 月を出す 月を出す

開金 開金

妻に付く 妻に付く

童の歌ひ 童の歌ひ

なるを なるを

云 云

鳳呂 ガンブロ

移鳳の俗語 時小きを木を くゝ 未を是を 初の労を 海上を

体の時を 体の時を

を を

を を

を

秋風　秋の宮
子秋乐　新陰

植物類

梶の葉　梶の葉
芋の葉の葉　つぬ芋
桐　一葉　桐の葉
柳　秋風
青くて　木槿
柞　穂
楸　濱ぶさき
水瓜の実　梶の花
常山の花　梔
棗　葡萄
蕣　蘭
秋海棠　桔梗
きちかう　女郎花
おみなへし　芭蕉
水仙　蘆尾草
萩　旋覆の花
萩の花　萩のすゝき

四季

七月　植物　三月　たつ　四十六

ほさせ申を作らんとする時殷賑を重て初とせ
九蕃已ゝ日まを重て稲暴まるものゝ多ければ蕃又ハ箱ゝ入れ
並へ置所を蕃棚ゝ云　則委ゝ家を云

よ

蓬餅　本朝食鑑　蓬餅ハ嫩き艾苗を
采り莖を去り煮熟して蒸し
搗ゝ合し搗て餅ゝ
作る三月上巳の変食也

吉野の會式　十日　吉野院の
寺説ゝ云大和国吉野山子守勝手の両明神の神
輿本妻へ渡御ゝ三月花の頃彩色花會式と云
楊貴妃櫻　奥福寺の境内に有ゝ
名ゝ一説ゝ此花大福ゝして紅色
を含ゝ淡葉に交りゝ
ゝ説ゝ或ゝ猿の尾ゝ又ハ山鶯又ハ蛍、杜鵑、
ゝ説ゝ
呼子鳥　此鳥のゝ古今集三
月の一首ゝ云て詠出
ゝ説ゝ
風光る　初学記　春晴日出
て風吹を光風ゝ
笠　或書ゝ云呼子鳥ハ
帰て愛ゝ
ゝ説ゝ
ゝ説ゝ

つ

茅花　本草　白茅ハ茅の穂ゝ
故ゝ茅花茅ゝ云白き花咲く
蹲

常山の花　梔
棗　葡萄
蕣　蘭
秋海棠　桔梗
きちかう　女郎花
おみなへし　芭蕉
水仙　蘆尾草
萩　旋覆の花
萩の花　萩のすゝき

す名鶯の如足を揃ゝ
云もの多ゝ今俗のかんさゝ云ゝ
高雄法華會　安良比花。
高雄縁起　云三月十日
會ヤスラニハテヨ
百練抄　久寿二年四月近日京中男女風流を備へ鼓笛
を鳴ゝ
て禁止ゝ
紀事　今日
雜談抄　
竹秋　廣韻　竹秋三月也　蘭秋七月也　**賛寧**　竹譜　八月爲春二三月爲秋云云
鷹の巣　和漢　三才圖會　鷹巣ゝ生ものハ好て眠ゝ木ゝ巣ゝ者ハ
常ゝ雙ゝ人家ゝ育ゝ

ふるえ草 ふるうあくさ
翁草

觀音草 おとぎり草
業障草
五味子

仙翁花
紅梅草

顛桐
ひかりの花

鳳仙花
つぼみをふか

解苔草
益母草

めでぐさ
夏蘇仙花

ちひさとさふ
うちんの花

すぼひ草
茗荷の花

蓮の実飛
夕貌の実

青鼠
粟の穂

星草
穀精草

蓖麻子
たりまの

稲葉
いなずの雲

立のまるせ
稲の花

富士の花
水彩草

早稲

まくわ田の稲穂

隱元豆
西瓜

陰瓜
南瓜

ばうふら
うかうや

陰木

蜀
千金翼方 羊蹄花を採りて搗て鬱死す故に去らしむ一説に羊の性至孝之此花の赤き苔

二尺許あり 紅蜀 山柘榴、又映山紅、又杜鵑花云 ● 白蜀 一名 紅蜀、又 細辛乃陰陽山乃白菅自吾公尼保波氏妹公示、作者 ● 羊蜀 花名也 出の名も似たり 和名抄 羊つどし 以波豆々之 一云毛知豆々之 ● 蓮花つどし、遠く望ハ蓮の如し 蓮花つどし 訓も 蘭蜀 本草 葉ハ大蓼の如く枝蔓の如し 小木之花も 花似て小さく色ハ葱之云 大山の岩上に有 同上 紫の花 ● 紫の山つどし、 花つどし 一丈 詳 常のつどしの三倍大さ有り 花ふる 葉三角 野中日光山中之 出人見をや シホ、云 白花のものを白ヤシホ云 ● 姫つどし、 活 外山中 花紫色 少 ● 瑠璃つどし、 紫の花

萩の上風
芒
萩
菓
蔓
陰木
瓜南瓜
西瓜
豆
早稲
稲の花
うんの花
夕貌の実
夕貌の実
蓮の実
蓮の実
蓮

鬼灯	花菖	菖かしら	菖蒲草	犬子草	白たこ草	牛房引	冬瓜	豎芋	小芋
灯籠草	千種の菖蒲	菖蒲の葉	菖蒲草	かやの苗	絵の表紙	牛蒡	冬瓜	豎芋	小芋
実すぐき	一すぐき	実すぐき	実すぐき	かやうとり	絵の表紙	牛蒡	冬瓜	豎芋	小芋

鬼灯 実すぐき 実のすぐき

花菖 一すぐき 菖の根すぐき

菖蒲草 千種の菖蒲 百菖の草

犬子草 小かやの苗 かやうとり

白たこ草 絵の表紙

牛房引 牛蒡

冬瓜 冬瓜

豎芋 小芋 かしら芋

菖蒲草 菖蒲の葉 菖蒲草

菖蒲草 菖蒲草

菖蒲草 菖蒲草

菖蒲草

松むし　人まつむし

鈴虫　鬱虫

馬追虫　はたりくさ

竈馬　つくさせこほろぎ

精劫　但織

はこく　蟲

猫むし　蟷螂

やんま　鬼ゑんば　赤蜻蛉　秋津虫　いがぐり

蟷螂

秋蟬　蜩

くまくまし　来蟬　我こら鳴

藻に鳴虫　みの虫鳴

抽て小花咲く楊梅の花に似り並のまゝ五月九猫の形ちなり

製図

や

柳の鬘　酉陽雜俎　唐制三月三日侍臣細柳圈を帽上に巻く

草餅　母子草を猫耳餅と云る蓬餅

蚕毒を免る云く桃の枝に柳鬘をつくる事なり

新太刀を見ては初めて児童に授ひとまつるもの

八重桜　風花集　八重に九重にみちのくの　伊勢大輔

八重桜　奇しくも八重桜は咲きにけり　八重桜は咲きにけり

大和本草　棣棠は園史及び花譜に其形状詳なり

山吹　殺ひさ山吹なるを八重咲き詩に記さるゝ歌冬、酴醾、黄

ヤマブキと訓ずる誤なり

山吹衣　桃花雨説　面洗打蒸毒美冬

三月に至り著之

又花山吹と云

楊梅花　本朝食鑑　樹高丈餘葉如端香水楊而細厚深青経冬不凋二月開花三月四月結実

薬師寺最勝會　七日

十二日に行る七ヶ日の法会郡に薬師寺は大和國高市郡にあり天武九年十一月創立持統文武の二帝祝

父恵し　父もまく

蛭蚓鳴

秋の蝶　くまゝの虫

田の雷送る　小雲

ほうら雲　若雲

兄鶏　鷄

小隼　雀

撫鷹　青鷹

網掛鷹　鶉

雲　打鳩　吹

鶉

うづら籠　うづら網

うけ志ゑ　ゑびす鳴

片うづら　うづらの床

鳴

川原志ゑ　百羽かき

け

五形　漢名稗米蓼、俗云五形、又蓮花艸　和漢三才圖會　春苗を生ずる千葉皂莢及ひ槐の若葉に似り両々相對し枝莖地に布て蔓乃如し節の上に莖を抽んて頭に花咲く三月より四月の末まで蔓二寸に花咲ずして葉の間に白き処有形蓮花に似り莢を結ぶ三稜黒色長さ六七歩中に細子有るもおのづから撒て生し易し其葉を煮て人以て野菜の一奥とす

孫生山　貞徳曰孫生山名所あり

柳鬘　和漢三才圖会　雛祭詳字処に河柳乃中に多し状似く白色淡黒ゝ

華鬘草　和漢三才圖會　花鬘草と云ふ天餘蓼に似るに似るに似り三月莖端に花咲く淡紅色容を為す花莖長く花鬘を約形ちに似り

る

普賢象櫻

略の別かき

後のちやにえ
後の夢くね

小男鹿 書元森

すゞるかせき

鼈

江鮒

鱧

貼 梁

芋むし

百舌鳥

鹿

森笛 ちく垣

みすぢの錦 鳥

川ちく

にぎりし陽主

沙魚

小鰐

九万足

鰻 梁

案山子

源氏

横川詩序 普賢堂八天下を一世に傳ふ、鎌倉に堂あり普賢を安置す、後に移して俗に普賢堂と云、或は普賢家と云、和訓亮と花と音同し、花白く旦大なるもの菩薩乘る処の白象の亮の如しと、両説何れか是なるか

藤 フジ

大和本草 花春の末より四月に咲くる、花の長さ三尺に及ぶ、花蘂に拂を加へ久しく萎まず本州に敗酒と共に用ゐるに正しと、相豆に動る波、藤波、藤波、藤波をかけ

●藤波、

幸夷 コブシ

格物論 一名

花茎の末に直て実あり一説に拂の多に似たり

侯桃、木筆、二月花茎の末に直て実あり一説に拂の多に似たり

故に幣もぐしと云、紫のものは木蓮に似たり香氣蓮のごとく蘭に近し

稲花 コバノハナ

和漢三才圖會 稲は小稈叢生して高さ三四尺葉狹く長く花は穎の如し俗呼て小粉花 コマリ

小粉團花

同上 木の高さ四五尺葉狹く山吹に似たり花形粉團の如く白し

金王桜 コンワウサクラ

一名憂志桜 云東京淀

横川詩序 普賢堂八天下を一世に傳ふ、鎌倉に堂あり普賢を安置す、後に移して俗に普賢堂と云、或は普賢家と云、和訓亮と花と音同し、花白く旦大なるもの菩薩乘る処の白象の亮の如しと、両説何れか是なるか

大和本草 花春の末より四月に咲くる、花の長さ三尺に及ぶ、花蘂に拂を加へ久しく萎まず本州に敗酒と共に用ゐるに正しと、相豆に動る波、藤波、藤波、藤波をかけ

●藤波、

幸夷 コブシ

格物論 一名

花茎の末に直て実あり一説に拂の多に似たり

侯桃、木筆、二月花茎の末に直て実あり一説に拂の多に似たり

故に幣もぐしと云、紫のものは木蓮に似たり香氣蓮のごとく蘭に近し

稲花 コバノハナ

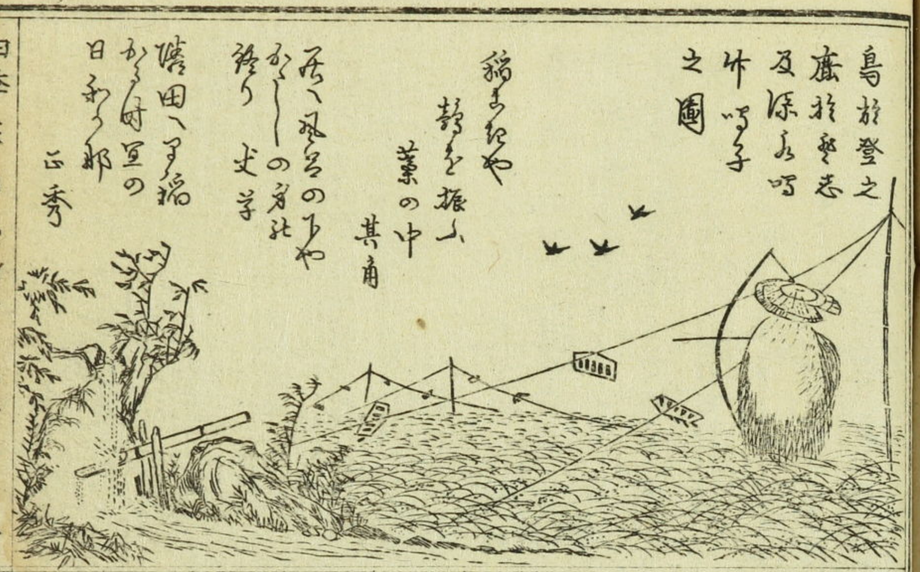
和漢三才圖會 稲は小稈叢生して高さ三四尺葉狹く長く花は穎の如し俗呼て小粉花 コマリ

小粉團花

同上 木の高さ四五尺葉狹く山吹に似たり花形粉團の如く白し

金王桜 コンワウサクラ

一名憂志桜 云東京淀



谷八幡の社地に有て淀谷金王丸が載せしと云つゝ

高麗菊 ㊁ 妻菓の条に出す

㊀ 江戸 エド

桜 サクラ

定桜 この種関東に多し一説に江戸桜

●右衛門の桜、東京四ツ谷柏木村延正寺某師堂の前に有る昔武田左門と云者此桜を愛せり当所は柏木村にして右左門が

愛せし桜なれば後人源氏物語

柏木の右左門と假借して名とせり

化倫草 エビネ

和漢三才圖會

今多く庭園に植る其花を愛せ子も周て葱に似て厚く長し地に布て生ず三四月莖を抽て花を生ず花形蝦蟇の如し肉紅色或は淡黄或は褐色数色あり江其根蝦に似たりと云

㊁ 田鼠 デンソ

化鶉 ケワシテウツラ

月令 季春之月、田鼠化為鴽 桁義

本艸 鶉、鶉と雄と雌行去

を長寸許て目極て小く頂赤短く嘴反安し或は竹弓を置て射取鷹を飼ふ裏小正三月田鼠化して鶉と成

八月鴽化して田鼠と成

㊂ 浅葱桜 アサキ

大幡ゞて八重に色は深青白色を

踏青 アヲキヲ

輦下歳時記 唐人上巳曲江頃

都人飲踏青、三月三日山野に出

必為て細獨ささかし我 蕣わ
ほつ〳〵て東山さまける晩鐘 蝶夢
淀の地も捷ひ出る 稻の秋 寥松
陸奥の果も見きます稻の波 真女
風を夢ゑをんの草ゑ子ゑ 与池
朝霧の野かへまる哥ゑうゑ 徐道
餞送の日へ吹例さ淀かしゑ 一昊
つる事のなんゑくかまゑ 我風
哥子徳俳して志ゑ入日う部 梅通
春て春てゑ哥てゑれる天寿我 白酌
門哥子道を教ゑ出てゑ 中梅
蕣の遠い向てゑ見へゑ寅哥子 梅玄
稻ゑやもゑゑらゑき持ゑ 有吉
里近くゑるの明く里子ゑ 若山
哀ゑゑ寅ゑわ里子の松ゑ 夢ゑゑ
り先や二百十日の茶振舞 不菊

て遊ぶ

栗津祭 江州栗津祭いまゑ川市吳祭祀ゑ古へハ三月二日ゑり近世此祭三月十八日東京淺草三社祭現の祭見ゑ張いたんなる法今日

浅草祭

絶ち〳〵

杏花 和名加良毛く 大和本艸 唐土花ゑるハし、唐音を呼ゑ木アンズゑ一種花紅ゑして八重ゑあり俗ゑ六代桜ゑ名くゑ木低き時花ゑゑるにゑし長ゑて切べし年重盛の孫六代年長して切れ〳〵故ゑ名有

馬酔木花 和漢三才圖會 山谷ゑ生ずゑ高さ二三丈枝葉茂盛ゑ葉越く長し冬ゑ緑乃丈ゑ高き二三丈枝葉茂盛ゑ葉越く長し冬ゑ緑乃色硬ゑして枝極ゑあつまり生じ花芽を出春ゑ白花を付き房を作り子を結ぶ木房を垂れ一子の中細子多し四時凋ずゑ相俗ゑ馬酔木ゑゑくハ酔ふ故ゑ名つく

剪眉作の花。 蘭項曰二月苗を生し二三寸の時根を併ゑ葉ゑ除ゑゑ甚美ゑ四月ゑゑ花頭を出ゑ紅蓋花の如し青紫色ゑ人呼て千針草ゑゑ 多識篇 大蘭。鬼剪、此ゑ蹟人の眉拂の形乃如し故ゑ眉作の花ゑゑ大蘭ハ鬼の眉ゑゑ

東菊

引板鳴子 鳴竹 鑑帛 秋の狩場

衣食類

刈稲 運の飯 **新茶の湯** 饂飩 米 **初川麦** 麦ぬる麦 **ゑや麦** 切麦 **踊ゑ** 踊かさ **ゑのぶ** 右

神祇

同社祭 小野ゑ手水 **祇園祭** 池之坊立花

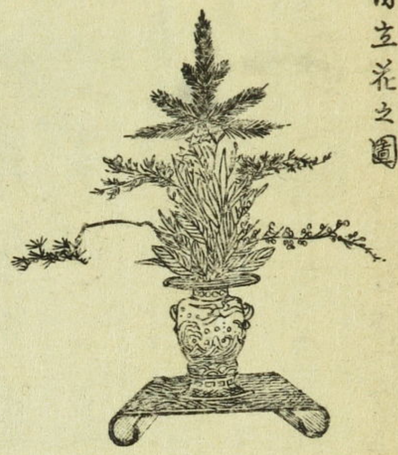
四季俳諸歳時記新編

其葉物は生ハ滿ゑ英の葉ゑ似く銘茶ゑ稍長し〳〵く葉ゑ子の葉の如し〳〵蓋を抽んゑ出ゑ六七寸葉乃頭ゑ花ゑ〳〵く一並一花形ゑ小菊の如し〳〵色淡黄色黄心ゑ葉ゑ細辨ゑ〳〵咲けゑ葉の形ゑ有ゑ四月ゑ傳ゑ往ゑゑれ乃ゑ

鮎子 小鮎。鮎汲。崔馬 若鮎。登鮎。

編食經 鮎ハ鮮ゑ似ゑ〳〵白ゑ〳〵して鱗ゑ〳〵春ゑ長し〳〵秋ゑ長ハ六七寸ゑ和漢三才圖會 二三月の初江河の交ゑ在て丈サ二寸ゑ〳〵ゑ鱗ゑ多本草食譜 鮎ハ背ゑ黑く長ゑ〳〵ゑ小鮎ゑ以ゑ〳〵ゑ或ハ二丈ゑ繩ゑ結繩の上ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ小石堰ゑ〳〵ゑ相戒ゑ小石河ゑ下ゑ〳〵ゑ一丈ゑ下流ゑ立ゑ〳〵ゑ廣網ゑ持ゑ〳〵ゑ二丈の竿ゑ〳〵ゑ二丈近付ゑ〳〵ゑ相依ゑ結ひ合ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵

池坊立花之圖



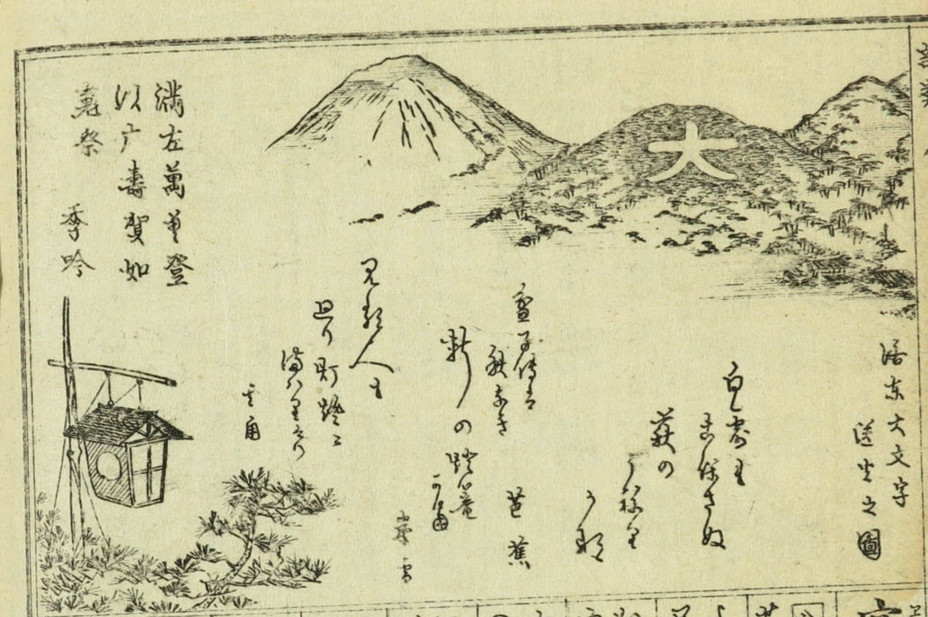
本願寺立花	同燈籠	同道奈	文殊會
迎	鍾馗	清水千日詣	施餓鬼
門茶	盂蘭盆	盆供	會

き中華に寄記し延宣年中長崎に来りし何清甫
じく、朝鮮より有るとい、●八重櫨、素良し、普賢象
楊貴妃の部に在り●吉野茅、仇名茅、夢見茅、ちがやの茅、
かざし茅、以上櫨の異名二●南殿の櫨、法近の櫨もくく
禁秘抄 紫宸殿の異角に有る木い梅ありしを後拾遺
して天徳の頃改て櫨を植られしより 歴代編年集成
ふるの雲珠櫨、重鞦の雲珠に似るをいふ
●塩竈梅、櫨葉至て黄色あり冬枯葉ことに紅うるはし
●紐さくら、小櫨にして莖長く葉蒼玉赤し●櫨戸、
田、連雀新式抄 櫨のさくらのことを云二説の櫨も一木
ぶい生せぬるものにて多くくるくるとい●櫨人、櫨の
哥林良材 櫨の木くく造りしる戸に板の戸、揖の戸、の如し
一説に戸の近辺に櫨の咲なるを云櫨の有るものの宿あり
●櫻狩、奥儀抄 櫨を尋ぬる来るを云何を求るも狩
ゝ云紅葉狩又草狩等に同し●櫨草 和漢三才図会 山谷乃
櫨の中に生る即九輪草
催馬乗の呂歌に云之
の一種美種多り葉の形も相似く微小し三四月莖を抽
んで花を生じ茎の淡紫或は白花櫨の花の如く最美之

魂祭

聖霊祭	みそはぎ 蓮の葉	樒	根芋
青樒	掛そうめん 麻がら著	送り火	墓参
友書納め	揚燈籠	内裏の灯籠	彩の灯籠
燈籠	燈籠流し	三井寺女詣	安居頭
大文字火	妙法の火		

櫻鯛 水族食鑑 弄書に云春三月櫻花咲さて臣人多くこれを捕る故櫻鯛と云京阪の人俗に魚
先為に云此時鯛多くこれを捕る●櫻魚、常にさく
ら河魚の国に一種の魚なり櫻魚又云若さくら則
此国の名産にて
裏陵多く川へ登
い来り多り俗字に云そ此魚所くに者先江湖に居て寸
くる大なるもの七八寸背黑く腹赤し信州諏訪の
櫻衣 道遥院御抄 面白裏青、笑白大臣等春着之 紫式部日記 面白堂裏葡萄染、又面白裏赤
湖水に赤魚とて櫻根湖水に赤鮒と云也四
くこれあり櫻花咲ころ捕るゆえ櫻衣と云
櫻草 和漢三才図会 山谷乃中に生る即九輪草
櫻狩 奥儀抄 櫻を尋ぬる来るを云何を求るも狩
ゝ云紅葉狩又草狩等に同し●櫻人、櫻の
櫻戸、
櫻こまを 江陵懸志 櫻根一種暮春の時節之
櫻鯛 水族食鑑 弄書に云春三月櫻花咲さて臣人
多くこれを捕る故櫻鯛と云京阪の人俗に魚
櫻魚、常にさく
櫻人、櫻の
櫻狩、奥儀抄 櫻を尋ぬる来るを云何を求るも狩
ゝ云紅葉狩又草狩等に同し●櫻人、櫻の
櫻草 和漢三才図会 山谷乃中に生る即九輪草
櫻戸、
櫻こまを 江陵懸志 櫻根一種暮春の時節之
櫻衣 道遥院御抄 面白裏青、笑白大臣等春着之 紫式部日記 面白堂裏葡萄染、又面白裏赤
櫻人、櫻の
櫻狩、奥儀抄 櫻を尋ぬる来るを云何を求るも狩
ゝ云紅葉狩又草狩等に同し●櫻人、櫻の
櫻戸、
櫻こまを 江陵懸志 櫻根一種暮春の時節之
櫻鯛 水族食鑑 弄書に云春三月櫻花咲さて臣人
多くこれを捕る故櫻鯛と云京阪の人俗に魚
櫻魚、常にさく



宴 流觴。巳字盞。 [荆楚歳時記] 三月三日四民水濱並ひて流觴曲水の飲をなす。羽觴を飛す。

[公事根源] むかし玉卿ども参りて酒盞に詩を作る講巳日後苑に東保の侍臣のぼりて盞をうかべて文人以下こもりの文帝又奥しての戈を試る羽觴を飛盞を用ひ形船を作り水のながれにうかべ

[扶桑拾葉集] 曲水の地智は巳の字に似たり此會周の世の前より始まる久く絶たるを魏文帝の時又復して宴の事をいとなむ善惡遠近を分て臣下に似たり貝殼を敷て巻を穿ち形船を作り羽觴を飛盞を用ひ此盞をうかべ水のながれにうかべ

三月二日絶供養を供ず太子夢殿の經供養是なり

金鳳花 一名毛茛、又鬼の田芹子、春苗をはやしまさきの又余一枝三葉、葉に三尖及び三鉄ありて四月小黄花をひらく五出実光艶ありて実を結ぶ形鉾に似たる春菜の様なれども尖なり [文和本草] 石竜芮に似たる毛ありて光なし花黄にして毒草にして食べからず河骨の花に似たりて毒草にして美

金盞 金盞艸、一名長春花、金盞花の形ちに似たる長春花に似たるを黄金色の花盞子に似たり

菊 **裁香** [月令廣義] 菊花、穀雨の時根を掘起し壮嫩を剪様の根なるもの芽を種べし白

油花の [國經] 洛陽上巳の日婦女皆の花を以て曲水に浮べ花を水上に流し若竜鳳花弁の形ちを作りさまざまの吉ウラナヒト

楊梅花 [花彙] 八閩選志に云楊梅の木大なるもの五六抱に近し春花咲白色花を油を油花ト云

已日桜 [韓林] 三月桃花水之時、鄭国之俗、三月上巳、於溱洧両水之上乾蘭招魂續魂祓除不祥、本邦も早く此ことあり [寸須] 小く最も早く実を結ぶ実を結ぶ実を実桃物語の巻

水尾祭 九日 [神社啓蒙] 水尾神社は丹波国桑田郡、愛宕山の傍に有り [外傳] 三月上巳蘭招魂續魂祓除不祥、本邦も早く此ことあり

[廣州府志] 心淳光院壬生に有り故に壬生寺と云又寛幡天皇

壬生念佛

鳥居火 舟の出 花 金盞艸、一名長春花、金盞花の形ちに似たる長春花に似たるを黄金色の花盞子に似たり

花火 流燈 岩倉燈籠踊 長谷燈籠踊 相撲関目踊 文覚忌 地蔵會 弁天会 盆踊 遊の峯入

八月之部

相撲使 撰の祭

乾坤

八朔　田面祝　田の実いそしんで祝ひ日　繪行器

後の世代　竹喜

長夜　夜寒

秋　秋寒　秋さむし

そぞろ寒　うそ寒

淋さ　冷〻

暴風　水神祭

雷声収む　秋夕　秋の夕べ　秋の夕べ

良夜　初汐

月見

寺〻云中世三井寺に属す故に小三井寺と字す本尊地蔵にして傳に鑑真の像有り真言宗南都の招提寺に属す

中興は一條院正暦年中円覚上人此寺に住し始めて勤通念仏を修す今毎年三月十日間此法行なり

士人俳優を志す世〻を壬生狂言と云ふ鞠通念仏の

余源なるべし　雑談抄　この狂言に用ひる面は仏工定朝が作

三面有り云ふ

御影供　弘法大師の御影供なり承和二年三月廿一日入定今に至る今日

上巳　紀事　今日を修禊と称す年中五節句の一貫にして

我が初め云ふ所〻三月初の巳の日を上巳と云ふ三月辰

巳を建を除日とす以て不祥を除く云ふ

鞦韆の戯　習索。ゆさばり。ぶらこ。

荆楚歳時記　春の節長き縄を高木に掛け、士女裙服し

上下し戯れ遊ぶ故に秋千と云ふ俗呼ぶ

施約云ふ楚人寒食に鞦韆を習索と云ふ蓋し縄の戯なり今字書に字華不

従ふ実に秋千と云ふ

て車を用ひざる

雲形に人を休む月見哉

芭蕉

名月や池をめぐりて頬ぶくろ

其角

ふくろ迄月のうへ

名月や掘ればくもる土の底

嵐雪

名月や畳の上に寝て見ばや

去来

人琴に寄して略を捨ひ小恵誠を当日

住吉の祭に紀為加田武為品川に祭る

修學祭　五日　紀事　元此を七郷皆祭有り神一条

寺の八大天王に同じ又一説に赤山明神正に

順の峯入　雍州府志　往昔役の行者入峯の道を

志し年毎に然り葛城大峯。

酩酊寺岡山平宝自ら斧鉞を執り吉野山より大峯

山の後に入り蛇の屋より出で戴を逐て然を出る

を逆の峯入と云○裏の峯入を呼ぶ

動む所護院内門室に見を撿校せる三井の長

吏僧誓信伝その法を逆に峯を逆に当山方

志を動む三宝院内門室に於て見を行なう

石楠花　去れば石ばなの花　水草　石間陽に

向かの所に生ず故に石南と名づく

花彙　処に依り中に有之強弁大和金剛山に多し樹大

もの丈高く枝條繁軟にして葉小蓋茶碗ばかり

新しく厚く長し面深緑裏に毛茸ありて茶褐色

なり四月枝梢に花を付く数十集り生ず粉紅色簡

汐干　紀事　三月三日汐干と乾

く泉為堀の海辺に出る

[illegible]

○

仲秋の還さもさん今日の月 芙村

[illegible]

○

[illegible]

子古出形ち園の花に似たり
大かす除頗る葉観に堪へたり

榕の花 和漢三戊図會

木樵も葉掘に似て長く摘きいたして撥に
なりたり月細さ白花を付けさ実を結ん

沉丁 和漢三戊図會 瑞香、俗に沉丁花、椒、瑞香、類なく
ハ此山樊の類にもこれに比沉丁花にてもさもの四五尺

枝幹繁茂して葉ハ茜もさ抱子葉及び橘の葉の如
春花を著く丁香の如くして此等也野に茂る所ハ四出
外淡紫内白く十余朶横簇まりて香
[illegible]

高麗菊 和漢三戊図會 俗に[illegible]菊、黄花を
[illegible]

秋色樹 東京本郷山法寺豊の[illegible]井の
傍にあり一名大般若樹と云小網町
[illegible]

菊 和漢三戊図會

雛 雛遊。雛飾。紀事 三月三日良賤の児女紙人
立雛。紙雛。偶を製し是を雛と称し形代物

[illegible]

人丸祭 十月十八日○古へ宮内の影供を修す
今[illegible]和哥を好む人きく此日
[illegible]

片良 十五日。[illegible]良村の[illegible]神輿三基山王十禅神ハ
[illegible]天神の両社一十禅師ハ南北良村の[illegible]寺で
[illegible]天神ハ北比良村の[illegible]寺ハ南北十
[illegible]又南小松村の[illegible]寺ハ八幡宮北小松村の
[illegible]十禅師天神を合[illegible]西村三社の神輿三社
[illegible]

名月 [illegible]初月
[illegible]の月 [illegible]合雪
[illegible]月

待宵月 新月 十五夜
[illegible]新宵新 [illegible]小雨
[illegible]名月

有ふ知 十六夜
[illegible]知[illegible]月
[illegible]

月 [illegible]の[illegible]男
[illegible]の雪 [illegible]の[illegible]
[illegible]月

上弦 [illegible]の[illegible]月
[illegible]の雪 [illegible]の霜

下弦 [illegible]月
[illegible]の[illegible]

月待 十七夜

立待 十七夜

居待 十八夜　伏待 十九夜

更待 廿夜　廿日 夷中 夷中月

北三夜月　玉兎 常義　嬉戯 金波　求聞 水鏡　玉兎 銀盤

星月夜

植物類

八朔梅 初もぎ　名の木苺 梅もどき　木犀花 桂乃花　漆の花 銀杏　ぎくろ 菖根 頃

桃 モヽ

桃花 ハナ 車類賦 其花或ハ仙ク壽ヲ益シ或ハ鬼ヲ制シテ邪ヲ祛ク或ハ后妃の德を称め或ハ瓊瑤の華ニ報シ○或書ニ伊弉諾尊桃子三箇を投て火攻女を擊、悪卒皆去依ヲ桃核

霊元帝の御宇ニ及テ勅ありて紀氏を奥し廢たる紀氏を復一位の賜ありけるとぞ

江戸桃 三名一種漢名を金銀桃ニ云八重ニして色紅ニして大ニ紅色なるを緋桃ニ云 ● 源平桃 日月桃 白く或ハ淡ニ三子年ニ花実ニなる桃あるなり花八重ニして大きく頗美ニ ● 油桃 花常の桃より小さし 和名桃核 李桃 和名都波岐毛々 ● 二千世草 ● 御酒古草 漢名 桃酒 サウ

蘭湯盡経 太清本艸本方云酒ニ桃花を漬して色を飲めば百病を除き顔色を益す 千金方 三月三日桃花一斗一升をとる井花の三升麹六斗米六斗一色を以て物を酒に漬し蒸めハ太たちし

芙蓉 水ふよう 芙ふよう　牡丹根分 芍薬根分　蓋の花 山ぢしの実　敗荷 巻もさ紀　紫菀 ましろに 鬼のまと草　花野 宇治の花園　鶏紅 水引の実　おしろいの花 檀特の花　麥草 青花　金凱草 まるつぼ草　烏頭 ちゝぶの実　三七の花 雀麥

木蓮 モクレン 花 クワ

大和本草 國俗此ヲ木蓮花ニ云花の色悪シ白きを白木蓮ニ云色を

茎い蓮ニ似タリ葉ハ辛夷ニ似タリ三月花開く

忌 キ

洛の東山ニ中臣氏山薬師ハ忌を修ス之ニ釈迦寺ハ不可棄肥の後洲鹿郡の人母ハ巫部氏生て数日樹下ニ棄つ二日を経て禽獸の害なし阿妹往て之を見ニ児ニ抱き授て母ニ与て十八ニして落髪

建久二年四月入宋五月の初宋の江陰軍ニ着す建暦改元年帰朝著禄元年十月泉涌寺ニ重書を建ル喜撰法師

東華講院ニ住し嘉祥三年六十二ニ入滅ス 法會八日 又九日修之

右脇し奥州ニ遊ス

十四〇唐の終南山悟真光明善導大師の忌日ニ唐高宗永隆二年三月十四日迂化ス本邦東山禅林寺ニ永観堂知恩院小松谷百万遍ニ本の寺院ニ在ル此忌ヲ修ス

千本念佛 センボンネブツ

紀末 是モ勢通念佛の音流ニ安楽堂菊の普賢像模写ス 朱雀通の北限引接寺簡魔堂ニ

宋三石五斗を賜ハル以之七ヶ日念佛の料ニ す一説ニ此法事ハ元刑人の為ニ設ケ故ニ諸司代ニ施米有ニ追薦

雞頭花 美けんこう

鳳凰紅 葉鶏頭

花もち紀尾 花

蓮の種 まきかの蓮

木槿 むくげ 垣

茅 藤 陰中山の花

芦の花 ねしの種

海桔梗 五ひ一ひ

ちくさ 竜 瞻

くたに 笹 ちんたう 山ちんたう ちくさ 茅

鶉草 藥 堀

苦参引 なりやえ引

の種一ちくさ○岡基定覚上人種の話に形並たり

仙壺萩 千梅いえ 仙壺

花を愛して豆の花の如く黒い世を彩る似さ桑ゑ二ちく

物語須广巻 中ひの つの花をいそぐ花も巳の日に源氏須广へ左近の時三月の朔日巳の日を曲回ちく舟に人形を立めひ

須广の御萩 源氏

桜の具ちくし萩除しゆ人 桜ちくの桜妻ちくち

李の花 李の花 本草物長名 三月花咲ちて五出白色

蘇枋の花 和漢三才図会 蘇枋の木ちて枝皮法ちて白色葉落ちく光あり莖長し三

月花咲 紫 大さ麦 豆斗法 菫 菫草ハ野に生ず人の栽ちたるハ三月紫色の花ちく ● 壺菫ハ

花の形 ちく墨入の意ちやえく

奮三月 姑洗律 清明節 穀雨中 季春、竹秋、病月、嘉月、

弥生、禊月、桜月、花見月、春惜月、

三月之部終

三月 啓蟄節 出雲祭一日、春季皇霊祭 十九日

春分中 弥生祭佐祭 春季神殿祭